されども彼は桜に願う

リオン・マグナス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

されども彼は桜に願う

【Nコード】

N2175Q

【作者名】

リオン・マグナス

【あらすじ】

世界のすべてに見放され、捨てられ、そしてそのすべてを騙していた少年は桜舞う島でいままでしるこのなかったことを知る

【誠に身勝手ながら、小説の内容を大きく編集させていただきました

ほんとに申し訳ありませんm(_____)m】

主人公設定&デバイス設定(前書き)

すいません、衝動的にかいちゃいました

主人公設定&デバイス設定

今更だけど設定です

悠二「ほんとに今更だな…」

うるさい!!

名前 水無月悠二（水無月健太）

年齢 六歳

身長 130cm

容姿 金髪碧眼の女顔。髪は金髪のロングでポニーテール

体形 まだ成長途上なのであまり筋肉は付けていない

性格 前世の事もあり、若干人間不審

しかし、基本的にはお人好し。

趣味・・・昼寝・読書

好きなもの・・・楽しいもの・家族・仲間

嫌いなもの・・・正義・傲慢

能力 【知ってるアニメ、マンガ、アニメの能力と宝具】

それを操る知識と技能。それに万華鏡写輪眼と直死の魔眼

魔力・・・EX

身体能力・・・SSS+

魔力変換資質・・・あらゆるものに変えられる

魔力光・・・漆黑（ブリーチの一護の卍解時の色と同じ）
ばんかい

?????

悠二自身が好んでよく使うのが

リアリティ・マープルアンリミテッドブレイドワークス
固有結界『無限の剣製』

全ての剣を形成する要素を内包し、オリジナルを視認するだけで容易く複製する事を可能とする。

本来なら、ランクが下がるところだがこの世界には本物は存在しないために起こっていない

一度複製した武具は結界内に登録され、以降は結界を起動せずとも投影する事が可能。

あるものに手を加える結界とは異なり固有結界は使い手の心象風景を形にして現実を塗りつぶし、世界その物を作りかえる。

固有結界を発動させると、担い手の存在しない剣の墓標が広がる赤い荒野。境界線として出現するのは地を走る炎。

そして、天を覆う無数の歯車

発動呪文は英霊エミヤのモノを使用

悠二「投影魔術はこれから零れ落ちたものだな」

そうそう

次！

ゲイトオブバビロン
王の財宝

バビロニアの宝物庫と、それに繋がる鍵剣。

持ち主の蔵と空間を繋げる能力を持つ。蔵も中身も所有者の財の量に準ずるため、何もない人が使っても何の意味もない。

ギルガメッシュは生前自分の蔵に「宝具の原典」を含めた大量の財宝を収めており、王の財宝でそれらを空間を繋げて自在に取り出したり、射出することが出来る。

悠二の場合はこれにくわえ、^{ゼウス}優衣によって派生品や魔道具なども収納されている

これだけでも十分チートだな

こんなもんか？

悠二「まあ、こんなもんだろうな」

ああ、あと十二の試練^{コセットハンテ}はないから

悠二「それがあつたらほんとにヤバいからな・・・」

んじゃあ、次はデバイス!!

シャルティエ

悠二の所有するデバイス

優衣が精神世界をさまよっていたシャルティエの人格を植えつけた
インテリジェンスデバイス

リオンのことは完全に吹っ切っており、今は現在の主である悠二の
我が身を考えない行動に気を揉んでいる

バリアジャケットは本人の希望でFFFACでのクラウドの服装
通称『ルフェイン・ジャケット』

シャルティエ自身は武器にはならない。けれども、その演算能力は
他を圧倒的に凌駕する

ゲイトオブパレロン
王の財宝の管理もしており、その収蔵物のすべてを知る数少ない人
物?である

のちに彼が制作するオリジナルのストレージデバイスも管理している

???

???

悠二「なあ、ところどころになる?はなに?」

ああ、それは後でお前に付加するチート能力

悠二「まだ強化すんのか!？」

ああ

主人公設定&デバイス設定（後書き）

まだまだチート化の予定です

では！！

転生（前書き）

どうも、初めまして

リオン・マグナスです

稚拙な文書ですが、よろしくお願いします

転生

俺の名前は水無月健太

しがないヲタク……だった男だ

なぜ、だったという過去形かという俺はついさっき死んでしまったからだ

それも、人を庇ってだ

自分でも柄にもないことをしたと思うよ

まったく…

神『ほんと、貴方はお人好しですね』

気付くと、目の前には金髪の幼女が立っていた

『神様ってか？』

神『はい』

なるほど、なら俺もそろそろこの人格とも御別れかな
神『実をいうと、そうはなりません』

心を読んだみたいだな

ま、神なんだから出来て当たり前か

『どづいつことだ？』

神『本来なら、貴方はあそこで死ぬことはなかったからなんです』

『じゃあ、なんで俺はここにいの？』

俺がそう聞くと

神『すいませんでしたああー！！』

突然、清々しいまでの土下座をした

まさか、あれか？

テンプレって奴か？

神『実は私がミスをしてしまったために本来なら死ぬことのないあなたが死んでしまったんです。本当に申し訳ありません！！』

『別に気にしてねえよ』

べつに恋人とかがいる訳じゃないし

神『怒らないんですか？』

『だから、別に気にしてねえよ。それよりさ、俺はこれからどうなるの？』

神『あ、はい』

土下座から、正座になる神

神『貴方には転生して貰おうと思います、どうですか?』

『ぜんぜん、構わんよ?……というか、是非させてくれ』

夢って以外に叶うもんなんだな(笑)

神『で、どんな世界がいいですか?…あ、漫画やゲームの世界でも大丈夫ではすよ?』

『マジかよ』

神『はい。本気と書いてマジです』

んならうないと思うけど

『ダ・カーポ?とリリカルなのはが合わさった世界ってあるか?』

神『少し待ってくださいね』

神は手元の端末を少し弄ると

神『はい、ありますね。そこになさいますか?』

あつたのかよ

そんなハチャメチャな世界が在るとは驚きだ

神『所で…』

『なに?』

神『特典として、いくつか力を付加出来ますがどうしますか?』

おいおい、どんな二次創作だよ(苦笑)

『んじゃ、俺の知ってるアニメ、マンガ、アニメの能力と宝具…それとそれを扱う技能と知識』

神『すごいチートですね…』

かるかあきれたな(苦笑)

ま、いいや

『それと万華鏡写輪眼と直死の魔眼。もち、ノーリスクで』

神『介入する気まんまんですね…』

まあね

神『では、そのようにして起きました。宝具や道具は王の財宝【ゲートオブバビロン】にいれておきますので。』

『あ、あとデバイスもお願いが。人格はシャルティエで』

あいつは好きだからな

神『了解しました。では、行ってらっしゃいませ』

その瞬間、俺の意識は闇に落ちた

出会い（前書き）

リオン・マグナスです

ダメな文章ではありませんがどうぞ

出会い

深々と。

桜が舞っていた。

驚くほどゆったりと。

音もなく。

見渡す限りに舞い散る桜の花びら。

それは一面を色づけるように、

白で塗りつぶされた世界を彩るように、

ただゆったりと舞い踊っていた。

それはとても綺麗で、

呆れるくらいとても綺麗で、

ひとりぼっちで、

ただ震えることしかできなくて、

寂しくて、

どうしようもなく途方にくれていたボクでさえ、見惚れてしまっく

らい、

綺麗な景色だった

だから、

だからこれはきっと夢なんだと思った。

真っ白な夢。

夢のような夢。

いつか覚めてしまうことがわかっているのに、

それでも夢見ることが夢見ってしまう。

新しい予感に胸を膨らませるような、

陽だまりの中でふと涙をこぼしてしまつような、

冬の最中に春の訪れを待ち望むような。

夢

差し伸べられた手をぎゅっと掴む。

温かな手。

凍える世界で、

雪の中で、

ぬくもりを確かめるように、

ぎゅっと。

そんな

始まりを告げる夢の始まり

そんな中、唯一つ・本来なら存在しないはずの少年が存在していた

彼はこの世界でなにを思い、なにを考え、なにをなすのか？

それは誰にもわからない

ただひとつ分かるのは……この物語

それはきつと原作（空想）とは明らかに異なるモノになるというだけ

【されども彼は桜に願う】

開幕です

主人公 s i d e

「さむいな」

どうも、 水無月健太です

転生させられたはいいんだ。

しかし、わざわざこんな真冬に飛ばすことないだろ

「ったく、サービスするのকাশないのか、はっきりしてほしいもんだな」

なんともいい加減な神様だな…うん

ん

桜の花弁が俺の頬に張り付く

……桜か

俺の目の前には雪と桜の花弁が同居する。なんとも、チグハグで幻想的な風景が広がっていた

「ほんとに転生したんだな…」

まるで、なにかの夢を見ているような感じになる

ひょっとして、あとすこしで目が覚めて、また【あの生活】

に引き戻されてしまうんじゃないかという気持ちにさえなる

しかし、これは幸か、不幸か…紛れもない現実リアルなんだ

「まるで夢みたいな話だな」

ふと、夜空を見上げると……

「なっ!?!」

俺の視界に【あるもの】がはいつた

それはこの物語の中心であり原点

そして、純粋な願いによって生まれながら…不完全な願望器

【枯れない桜】

まさか、転生して初めての場所がここ【枯れない桜】とはねww

テンプレ乙ww

んじゃ、さっそくチートスキル、使いますか

まずは自分の解析だな

トレスオン
「同調開始」

何本あるか、知らんけど魔術回路を起動させ魔術を行使する
さてさて、どんなもんか

年齢 16 6

ええええええ！？

なんで退行してんのさー！！

そついえばさつきから妙に目線が低かったのはその為か

魔力 F S S S + (リミッター存在)

F ってのは前世だな。にしつもリミッターで制限されてもこれかよ

∴ W W

魔術回路 40 1000

∴ ∴ ∴ もうなにも言つまいorz

アンリミテッドブレイドワークス
無限の剣製 使用可能

ゲートオブパビロン
王の財宝 アクセス可能

万華鏡写輪眼 使用可能 (スサノオのみ使用不可原因不明)

直死の魔眼 使用不可 (リミッターにより使用不可)

なるほど、でもなんでスサノオだけ使えないんだろうか？

まだ子供だからかな？

備考

ん、備考？

容姿について変更あり

黒髪 金髪

黒目 碧眼

つて、あんのオタク神め。顔まで変えやがったよorz
まあ、とりあえず能力の確認はできたな

さて、時間軸的にはどれくらいなんだろうか…

これが二次創作だったら義之が生まれるときなんだがな…

「そううまく行くわけないよな…（苦笑）」

そんなとき

？「子供!？」

後ろから素っ頓狂な声が響く

「え？」

俺は何とも情けない声を出してしまったorz
それにしても

さくら「ジーーーー」

おいおい…

こりゃ、どこの二次創作だよ（苦笑

さくらside

僕は・・・間違いを犯した
それを僕自身が間違いだって分かっている

「はじめまして、うーんと・・・」

僕は一人がいやだった

だから、桜に願った

そして、この子が生まれた

「さくらいよしゆき」

たったひとつの宝物たからもの

「・・・？」

何の事だかわかっていないみたい、可笑しそうに首をかしげている

「君の名前だよ」

よしゆき「・・・うん」

僕がそういうと笑顔で返してくれるよしゆきくん

そんなとき、不意に魔法の気配を感じた

「っ!?!?」

さっきまでなかったはずなのに・・・

「ごめんね、ちょっと待っててね」

いそいで、魔法の気配のしたところへ走る

すると

??「そううまく行くわけないよな・・・」(苦笑)

そういって、困ったように苦笑している義之君と同年くらいの子
年が立っていた

「子供!?!?」

おもわず、僕は呟いていた

??「え!？」

心底、驚いたようにそう呟いた

これが僕と水無月悠二君との出会い

改変(前書き)

やっけてしまいました、でもグダグダですorz

一月25日・修正

改変

どうも、水無月健太です

転生後、数分で原作の重要キャラと邂逅ってどうですか？

ご都合主義全開ですね、わかります

しかも、なんか縮んじやっているし（俺が

「僕は芳乃さくら。君は？」

「俺は……」

本名を名乗るのも手だがそれではつままない

そっだ！

「水無月悠二。よろしくな、可愛い魔法使いさん」

さくら「か、可愛い／＼／」

なにか、さくらが赤くなっている……風邪か？

「ゴホン、それで君はなんでここにいるの？」

あちゃ〜、しつかり疑われちまったよ（ ; ;)

「夜桜の見物……っても信じてくれんよな」

はあ…

かるく詰ってしまったな

ま、いいや

正直、隠すのも面倒だ

「俺の目的はお察しの通りこの桜だ」

さくら「ルナ！」

ルナ『了解。set up』

ええええええー!?

なんでさくらがデバイスもってんだよ!?

にしてもそれだけで戦闘準備とは……ちと気が早すぎるな

「おいおい、人の話は最後まで聞こうぜ？」

パチンと指を鳴らし、ここと俺の？宝物庫との空間を繋げる

……ほんとに出来ちゃったよ

さくら「え!？」

さくらside

彼の目的がこの桜の木なら見過ごす訳にはいかない

僕はルナを set upすると即座に槍を向ける

しかし彼は怯えるどころか不適に笑い

「おいおい、人の話は最後まで聞こうぜ？」

パチン

彼が指をならすと彼の背後の空間が波紋のように歪み

そこらな無数の剣や槍が刀身を僕にむけ、覗かせていた

「え！？」

ルナ『マスター！』

勝てない

そう思ってしまった

そんなとき、彼はため息を付くと背後の剣達が消えていく

悠二「俺はたしかに桜の木が目的だっていったけど、別に枯らそう
って訳じゃないぜ？」

「じゃあ、何が目的なの！？」

そして、彼はとんでもない事を言っただけだ

悠二「桜の修復……いや改変かな？」

「……そんなこと、出来るわけないよ……」

だって、僕が何十年もお婆ちゃんの木を研究しても完成させる事が出来なかったのに……

こんな小さな子に……出来る分けない

「できるわけない……か？……やってみなきゃ解らんだろ」

そう言っただけに微笑んだ

悠二 side

「できるわけない……か？……やってみなきゃ解らんだろ」

さくら「え？」

さて、いろいろ方法はあるけど最も安全なのは解析して自己診断機能を追加することだ……が。

今の俺の体でなんとかなるかな？

……無理だなorz

さて、それはさておきこいつにはいつかおきたいことがあった

「さくらさん、だったな。この事は誰かに相談したりしたのか？」

さくら「え!?!」

……その様子だと、してねえな。

そういうところはなのはとそっくりだなww

「ざっとみただけで二人は居るじゃねえか」

純一と……この時点では由姫さんかな？

まだ死んでないだろう・・

ほんとには原作を知っているから言えること

さくら「……これは僕が一人でやらなきゃいけないんだ……だから……」

ハア

思わず溜め息がでちまうぜ

「お前さ、一人で抱え込みすぎ……考えても見ろ。お前が無茶をして心配をかけちまう相手がいるだろ？」

さくら「……ダメだよ、お兄ちゃんにだってもう迷惑はかけられない
い」

そっか

そういや、こいつはそんなやつだったな・・・

「ならよ、俺が背負ってやるよ」

さくら「え！？……ダメだよ。君に迷惑がかかったら」

「気にすんな・・・俺が放っておけないからだ・・・」

やれやれ、どうやらこの世界に来て持病が悪化したらしい

持病？

・・・厨二病・・・orz

さくら *s i d e*

「…これは僕が一人でやらなきゃいけないんだ…だから…」

そう、これは僕一人で解決しなくちゃ行けない問題

誰にも迷惑はかけられない

悠二「ならよ、俺が背負ってやるよ」

え！？

「え！？……ダメだよ。君に迷惑がかかったら」

でも、彼は

「気にすんな・・・俺が放っておけないからだ・・・」

そういつて取り合ってくれなかった

そして、突然

「えっ!？」

彼は僕を抱きしめると

悠二「・・・さびしかったんだろ?・・・ならさ、泣けばいい。今は俺以外誰も見ていない、もう我慢する必要はねえ。これからは俺がそばにいてやる、それに・・・泣きたいときに泣かないと、笑いたいときに笑えなくなっちゃうぜ?」

ずるいよ・・・

突然目の前に現れたこの子はずるい

だって、あつて数分しかたっていないのに、僕が言ってほしいことを言ってしまうんだもん

ああ・・・

「うわあああああああああああああああああああああ!..!」

僕は泣いた

いままでの寂しさや孤独、苦しみを洗い流すように

彼は僕が泣き止むまで、ずっと僕を抱きしめていてくれた

悠二「大丈夫か？」

「う、うん／＼／」

……ほんといつ以来だろうか？

こんな風に泣いたのは

彼の赤い外套は僕の涙で濡れてしまっていた

「ごめんね。服、濡らしちゃって…」

悠二「きにすんな」

そういつてもう一着だして僕にかけてくれた

「あ、ありがとう／＼／」

不思議、彼の言葉は僕の心に自然に入ってくる

顔が熱い・・・

自分の心臓がまるで暴走したように早く脈打つ

53年前・・・僕がお兄ちゃんに抱いて・・・ついになわなかった
感情

また・・・僕はそれを・・・今度は目の前の少年に抱いている

これって彼の魔法かな？

悠二「んじゃ、始めますか」

「なにをするの？」

悠二「いまの俺じゃ完全に変えられねえが…ある程度なら改良はできる」

「っ！？……そんなことができるの！？」

悠二「ああ……トレース同調…オン開始」

そういつて、彼の雰囲気が変わる

空間の魔力が彼に吸収され、なにか別の力に変換されている

やがて……

悠二「同調終了…解析開始」

なにかの工程を踏んでるみたい

悠二「解析終了………変革開始」

そして、それからしばらくたち

悠二「トレース・オフ変革終了…全工程終了」

どっちら、終わったみたい
「どっちら」

悠二「ああ。回路を少し弄ったから楽になると思っぜ？」

さくら「あ、ほんとだ」

すけい「…」

これ……簡易的だけど自己判断回路！？

「な？」

さくら「う、うん…」

こんな事を一瞬でするなんて

一体、何者なの…

悠二 side

「んじゃ、始めますか」

さくら「なにをするの？」

「いまの俺じゃ完全に換えられねえが…ある程度なら改良はできる」

いまの俺はまだ六歳。完全に改変するにはまだ力不足だ

さくら「っ！っ！？……そんなことができるの！？」

「ああ……同調トレース……開始オン」

魔術回路を起動させる

これはさくら達の魔法が魔術に近いモノだから出来ること…

「同調終了…解析開始」

さくらのように桜の精神を潜らせ、解析を始める

「解析終了……変革開始」

なるほど、こりゃ完成するはずがないな…

…なんと桜の木にまるで魔術回路のようなモノが出来ていた

魔術回路を持ったものが作業をしないと完成させられるわけがない

「変革終了…トレース・オフ全工程終了」

俺はその魔術回路を少し弄り、簡易的な自己判断回路を組む

さくら「ぎじっ？」

悠二「ああ。回路を少し弄ったから楽になると思っぜ？」

さくら「あ、ほんとだ」

さくらが桜の木に手を当てて調べたみたいだ

…まるで洒落だな

それはともかく…よかった…どうやらうまくいったみたいだな

「な？」

さくらら」「うんうん…」

まるでしんじられないモノを見るようだなww

ま、いいや

とりあえず、目標は達したし…

家族（前書き）

お気に入り登録13件・ありがとうございます!!

こんな駄文を読んでもいただき光栄です!!

家族

悠二 side

どうも、すっかりダ・カーポ？の物語を根底から変えてしまった水無月悠二です

とりあえず、エミヤの魔術の応用？で枯れない桜に応急処置を施すと

「んじゃ、行きますか」

さくら「え！？…どこ行くの？」

「決まってるだろ？……今晚の宿探し」

俺は元々この世界の人間じゃないから家なんてない

最悪、野宿だ

さくら「こんな時間に？」

「あ！」

いま気付いた……と言つか気付かされた

そう、いまは夜遅い時間

そんな時間に六歳の子供を受け入れてくれるところなんてあるわけ

ないな

はあ

となると野宿だなorz

よしゆき「ねえ、お兄ちゃん」

俺がorz体勢で落ち込んでいるとよしゆきが俺の服の袖を引っ張っていた

身長はすこし俺のほうが上・・・軽く見上げるように

よしゆき「一緒に行こう?」

よしゆきがそういって笑いかけてくれる

ハハハ、よしゆきくん。あんだ、ええ子やあ

俺はその屈託のない笑みに救われた

でもな?

「あんな、俺みたいなの何処の誰とも知らん奴にそんなこと言ったらダメだよ?」

お人よし過ぎるってのも考えものだよ?

ナデナデ

前世では弟が居たせいか、頭を撫でる癖がついてしまっていた

よしゆき「う、うん／＼」

よしよし、いい子だ

よしゆきの頭から手を離すと

さくら「悠二くん……よかったらさ、うちにこない?」

……は?

おい、いまなんて言いやがりましたか?

「正気か?」

さくら「酷いよ!……それとも悠二くん、僕たちと暮らすのが……イヤ?」

よしゆき「お兄ちゃん」

や、やめる!!

そ、そんな眼で俺を見るな!!

……涙目+上目遣いは反則だ……

勝てる訳がない……

勝てるなんて豪語するやつは俺が直々にOHANASIIしてやる！

え？

どんなのかつて？

……もちろん……某白い魔王と同じ方式にきまつてるじゃん

「はあ、もう好きにしてくれ」

半ば諦めて、降参とばかりに手をフリフリさせる

2人「うん」「」

……人生……諦めが肝心ですorz

それから俺達はさくらに案内され、桜並木を歩いてある

不思議な光景だ

前世ではあり得ることのない幻想的な風景

まるで、雪のように花弁が舞っているのに一向に桜の花は減らない
この世界【初音島】ではなにも珍しくはないがあの世界【前世】で
は幻想、妄想の景色

まるで夢を見ている気分だ

さくら」どうしたの？悠くん

悠二「いや、なんでもない」

いつのまにか、さくらの俺に対する呼称が変わっていた

つい先ほどまでは【悠二くん】だったのに、いまでは【悠くん】

ま、いいけどわ・・・

そして、俺の隣を歩いているよしゆきが唐突に

よしゆき」どこにむかっているの？

さくらの手に引かれたよしゆきが可愛い顔で聞く

けっして、俺はシヨタではありません！！

そつち系の趣味もありません!!

さくら「いいところだよ。暖かくて賑やかでご飯がいっぱい食べられるところ」

可愛い…

素直にそう思う

正直、この笑顔がみただけでこの世界に来た意味があるってもちなみに原作をご存知の方はわかっていると思うが、俺たちが向かっているのは朝倉家である

俺はたぶん、芳乃家のほうに御厄介になるのだと思う…

そんなことを一人考えていると

ぐっ

原作と同じようによしゆきのおながなる

よしゆき「／／／／／」

さくら「あはは、お腹すいた?もうすぐだからね」

それをみて、さくらが幸せそうに笑う。

やっぱり、家族っていいな

よしゆき「えっと、あの、その……」

よしゆきは恥ずかしそうにうつむいている

やっぱ、小さな子はかわいい・

あ！

俺は決してそっちの気があるわけではありませんよ!?

ホントダカラネ？

さくら「さくらだよ。芳乃さくら」

さくらはよしゆきの顔をまっすぐに、そしてじっと覗き込む

さくら、すこしはよしゆきの気恥ずかしさをわかってやれ……

けれどよしゆきは恥ずかしさのあまりに目を反らす。

ありゃ、やっぱり恥ずかしいんだ・

まあ、当たり前か

でも、さくらはそれを別の意味ととったらしく、顔にすこし影が差す

それを見たよしゆきは「しまった」と後悔したような顔をしていた。

子供は純粹だ

よくも悪くも・・・な

人の感情に機敏に反応する

よしゆき」「……さくらさん

がんばったな・・・よしゆき

気恥ずかしさもたぶんにあったろうに・・・でも、よしゆきはそう
いった

けっして、大きな声とはいえない

でも

「うん」

笑顔が弾けた。

よっぽどうれしらしい

そして、同時に俺を方を向くと

さくら「悠くんも」

おいおい、俺はさっきから言っているんだが・・・

「さくらさん・・・さん」

さくら「うん」

「やれやれ」と内心苦笑する

俺だって決して気恥ずかしさはないわけではない

なんせ前世はヲタクだからな！

……威張っていえるようなことじゃありませんでしたねorz

さくら「やっと名前呼んでくれたね」

名前を呼ぶ……ただそれだけのこと……のはずなのに・

この人はそんなことでさえ……ここ数年はなかったのだろう

でも……もう大丈夫。俺が……俺たちが一緒にいるから・

もうお前を一人になんかせねえから

「じゃ、行こっか」

「うん」

さくらの言葉につなずく、隣を歩くよしゆき

親子……か

さくら「ほら、悠くんもいくよ」

そうやって。強引に俺の手を握り隣を歩かせるさくら

やれやれ

そんなこそばゆい光景に俺はまた心中でつぶやくのだった

顔には笑みを浮かべながら・・・

姉妹

悠二 side

ついに朝倉家へと至った俺達

そして

さくら「今日からここがキミのお家だよ」

さくらがにっこりと振り返りながら一軒の家を指差す

そこには俺としては見慣れているようではじめてみる朝倉家

その隣にたつ和風の家が芳乃家だろう・・・

よしゆき「ここが？」

「うん。ボクのお兄ちゃんの家なんだけどね。みんないい人だよ」

ピンポーン

さくらがインターホンを押すと、ぱたぱたと家の中から足音が聞こえてくる

そして、程なく

ガチャリと音を立てて玄関が・・・少しだけ開き・・・

由夢「……………」

幼き由夢がそこから俺達を覗き込む

よしゆき「……………」

由夢「じー」

よしゆき「え、あ、えっと」

由夢「じー……………」

よしゆき「あ、あの」

「じー……………」

よしゆき「さ、さくらさん？……お兄ちゃん!？」

興味津々な由夢に若干……といつかかなり戸惑つよしゆき。

さくらと俺に助けを求めるが

さくら「じゃは、こんばんは由夢ちゃん」

さくらに関しては原作どおり、無干渉のようだ……

すこし意地悪すぎやしないか？

由夢「こんばんは」

視線をよしゆきに向けたまま、さくらに挨拶する由夢。

よほどよしゆきに興味があるらしい・・・

すこしさびしいな・・・

だっておれ・・・空気になっちゃってるし・・・orz

さくら「この子が義之くん。この前お話した子ね、でこの子が水無月悠二君」

由夢「うん」

さくら「音姫ちゃんもおいで」

さくらがドアの奥の方に向かって声をかける。

するつ

音姫「……………」

小さく漏れる息と共に、ドアの隙間からもつひとつの顔が飛び出す。

朝倉音姫・原作でのメインヒロインの一人だ

音姫「ほら、ゆめ。ちゃんと外にでて」

由夢「はい」

ひょこひょこ出てくるふたりの女の子、というか・・・やはりお

約束というかなんというか・・・

小さな方は少し恥ずかしそうに、大きな方は少しぶすつとしながら。

やれやれ、これがあの音姉と由夢だとはね・・・

キャラ変わりすぎでしょ・・・

二人を前にしてよしゆきが困ったようにさくらを見上げるが・・・

さくら「ボクはお兄ちゃんに話があるから、後は適当にやってね。

」

予想通りの無干渉

さくら「ちゃんとは仲良くするんだよー」

そついい残し、さくらは早々と家に入ってしまう

・・・やれやれ

俺達二人が取り残される

よしゆきは相変わらずどうしたらいいのかわかりかねているが、
「こは年長者？として先に手本を見せますか

」とりあえず、俺は水無月悠二・・・よろしくな。二人とも（ニコッ

二人「うん／＼／＼／＼／＼／」

二人とも急に顔が赤くなった・風邪だろうか？

よしゆき「あーっと、さくらいよしゆきです。よろしく」

俺に習い、自己紹介をするよしゆき

そして手を差し出すが・

……。

でも、その手に触れるものはなく、ぶらぶらと宙に浮いたまま。

よしゆき「あ、あはははは」

そして、よしゆきが手を戻そうとした時、ぎゅっと温かい感触が右手を包み込む。

よしゆき「えっと」

由夢「ゆめ」

よしゆき「へ？」

やれやれ、なに鳩が豆鉄砲食らったみたいな顔してんだか・

由夢「あさくらゆめ」

そう言って由夢はにーっと笑った。

かわいいじゃねえの・

お持ち帰りはおK？

よしゆき「あーっと、名前？」

なに当たり前なこと聞いてんだか、この野郎は・

由夢「うん」

よしゆき「そっか、ゆめって言うんだ」

由夢「そう、よろしくね……お……」

よしゆき「お？」

はぁ……俺はどうやら蚊帳の外みたいだな・

由夢「お……おにいちゃん達／＼／＼／＼／＼」

とおもったが、ちゃんと入っていたみたいです・やったあ！！

音姫「おとめ」

ポツリと一言。

それだけ言うと、音姉は家へと入ろうとしてしまう

これで原作での初対面は終わり

だが……所がぎつちよん！！

「音姫ちゃんていいのか？」

音姫「うん」

おれの言葉に立ち止まる音姫

俺様という異端【イレギュラー】がいる以上、原作どおりに行かせるわけにはいかない

俺はポケットに手を突っ込むと

「ほい」

中から取り出したように和菓子を音姉の前に差し出す

音姫「これ・・・私に？」

「ああ」

実はこれ、俺が能力を使って作った物なんだが今ばれるのはめんどいからな。ポケットから取り出したようにしたわけだ

由夢「じーーーーー」

それをみて、猛烈な視線が一つ

由夢だ

どうやら、彼女もほしいらしい

「ほれ」

同じものをもう一個作りだし、今度は由夢に渡す

さらけ

「よしゆきにもな」

さらによしゆきにもあげる

「まあ、お近づきの印ってやつだ。シシシ」

前世のときのよように声に出して笑う

・・・ただ、知り合いには意地悪な笑顔だと言って不評だったけどね

音姫&由夢「あ、ありがとう／＼／＼／＼／＼／＼／」

「ああ、どうしてしまして（ニコッ）」

由夢&音姫「／＼／＼／＼／」

どうしたんだろう、二人とも顔が真っ赤だ

はっ！

まさかこれが噂のニコポか！？

・・・ありえないな。

由夢「そ、それよりも、はやく中に入ろう？かぜひいちゃうよ」

由夢に半ばひっぱられるようにして玄関をくぐるよしゆき。俺も続いてはいる

家に入ると温かい空気、そしておいしそうな匂いが漂ってきた

・・・俺が望んでも手に入らなかった感覚・・・いや、今は止そう

よしゆき「あ、え、えっと、おじゃまします」

由夢「ちがうよ」

よしゆき「え？」

由夢「ただいま」

よしゆき「ん？」

由夢「だから、ただいま、だよ」

由夢が屈託のない純粹な笑みで言う

由夢「今日からおにいちゃんのおうちだもん」

いまは・・・いまだけは・・・この幸せをかみしめよう

考える時間はいくらでもある・・・

みんなが笑えるようになってからでいいじゃないか

そう自分に言い聞かせるように心中でつぶやくと由夢に手をひかれて奥に行くよしゆきをみる

・・・ありがとう

口には出せないが、心の中で礼を呟く

その日、俺に【初めて】の家族ができた

音姫

悠二 side

「はあ・・・はあ!」

俺はいま、走っている。

前世ではなかったぐらいに必死に走っている。

原作通りといえはわかるだろうか？

そう、由姫さんが死んでしまったのだ

その時、俺は何もできなかった・・・

ゲイトオブパレロン アスクレピオス
王の財宝から神蛇巻く医神の杖で直せたかもし

れないが、それでもきつと延命にしかならなかった

その理由は俺がそれを使おうとした矢先に飛んできた神様が

らの念話が理由である

たとえば、俺がそこで直したとしても数年後にはまた病気は再発する。
・そう、あの神様は告げた

あいつがいうには、神様とは「世界」が作り上げた自己管理システムらしい

ひとつの世界で天文学的數字な確率で世界が調整のために人を殺す・

今回、それに選ばれてしまったのが由姫さんだったということらしい

・・・納得できるわけがない

そんなことをいいながらも、俺は・・・結局、アスクレピオス神蛇巻く医神の杖を使わなかった・・・あきらめてしまった居たんだけ

そして、体のいい理由を見つけて・・・それに逃げてしまった

だから・・・俺は音姉や由夢の前の顔を出す資格なんてないのかもしれない

だけど・・・もう逃げたくないから・・・

だから・・・俺は今走っている

原作通りに行くなら、

俺が行かなくても義之が何とかしてくれる

でも・・・それじゃいけない

俺がなんとかしないといけない

「はあはあ・・・音姉」

だから、俺は走る

すこしでも自分が後悔しないように・

みんなが笑っていられるように・

「いたあ・・・」

やはり、原作と同じように音姉はそこにいた

暗くうつむいているから、顔の表情は読めない・・・でも

俺は音姉の中に存在する感情を知っている・・・

だからこそ

「音姉・・・」

音姫「・・・」

音姉は相変わらず俯いたまま

だから、表情は見えない… 筈なのに俺には音姉の想いが理解でき
しまう

大切な人に先立たれ、まるで世界には自分しかいないような感覚

孤独感… 絶望

そんな負の感情が、今音姉を支配している

「音姉！聴こえてんなら返事をしてくれ」

音姫「聞こえてるよ…」

帰ってきたのは感情の一切籠っていない悲しい返事

「こんな所に居ると風邪、引いちゃうぜ？」

音姫「いいの…」

ダメだ！！

俺は心のなかで叫ぶ

今の音姉は【かつて】の俺だ

親に捨てられた俺を助けてくれた【あの人】を失った俺と…

あのままだったら、俺は此処にすら居ないだろう

「良い訳無いだろうが。純一さんだって、由夢だって義之だって…

…それに俺だって心配してんだからさ」

音姫「……………」

「だからさ、帰ろっぜ？…………俺達の家にな」

音姫「いや…………だよ」

「どうした？音姉」

音姫「いやだよ！！だって…………お母さんがいないだもん……………」

まるでダムが決壊したように溢れ出す…………涙

音姉にとって由姫さんの存在は特別なんだろう…

魔法のことをしる唯一の家族

魔法…………それが、音姉と由姫さんを繋いでいた特別な繋がり

例え、それが断ち切られたなら繋げば良い

音姫「このまま、病気に成れば…………そうすればお母さんに会えるんだもん！！」

まるで、なにかを振り払うように悲痛な叫びを上げる音姉

「なら、もし由姫さんにあったら、音姉はなんていうんだ？」

音姫「え！？」

まあ、物によっちゃ本物になるんだけどね

「トレースアウト
投影破棄」

音姫「あ！」

物騒なので剣は消す。その代わりに

「トレースオン
投影開始」

適当なデザインのネックレスを投影する

中央に宝石があしらってある銀のやつだ

……改めて思うけど、便利な力だね？（笑）

音姫「これ、私に？」

「ああ。ま、偽物で悪いんだけどね」

嘘です

これは偽物じゃありません

俺がさくらが持っていたのに独自のデザインを追加した一点物だ

ちなみに中央に鎮座しているのはモノホンのダイヤね

音姫「きれい・・・」

「気に入ってもらえて何よりだ」

音姫「じゃあ、御返ししなくちゃね」

ハイと渡されたのは大福

音姫「フフ、和菓子は嫌いだった？」

音姉の表情はなにき憑き物がとれたような明るい笑み

それをみて、俺は安堵する

そして

「いんや、甘いものは好物だ」

パク

和菓子を口に運ぶと高価な和菓子特有の上品な甘さが口に広がる

甘過ぎず、しつこすぎずってやつだ

音姫「どう？」

「美味しいな、うん。この味は俺のでも複製できるか不明だ」

久しぶりに自然に笑みが浮かぶ

音姫「あ、ありがと／＼／＼（か、可愛い／＼／＼）」

音姉の顔が赤いな…

ほんとに風邪、引いちゃったのかな？

作者「このリア充め！！…爆発すれば良いのに」

なんか、変な電波がきたが、それは無視、シカト、ブツチギリで

音姫「あのね、私はね。正義の魔法使いなんだよ！」

小さく、胸を張って宣言する音姉

音姉「だからね、君も魔法の事は秘密にしなくちゃダメだよ？」

「音姉がそういっただったらな」

まあ、さくらや純一はもう知ってるけど…（苦笑）

音姫「それにね、秘密を共有するってことはね、い、一心同体になることなんだって／＼／＼／＼」

そっぴや、原作でもそういうことだった気がするな…

それにしても一心同体か…

そんな風に考え込んでいると

音姫「私と一心同体になるの…イヤ？」

涙目+上目遣い……orz

このリーサルウェポンを出されてNOと言える奴は居ない……居てはいけない

もしいたら俺が全能力を駆使してこの世から抹殺してやる（怒）

「そんなこたあねえよ、ただすこし考え事をしてただけだ」

音姫「あ、ありがとう／＼／」

か、可愛いぜ

赤くなつて笑顔とか……最強すぎだろ

音姫「じゃ、じゃあ、指切りしよ?」

「ああ」

音姫「指切った!……よろしくね、弟くん」

あれ?

音姫「私だけがお姉ちゃんじゃ、不公平でしょ?だから弟くん、文句ある?」

「い、いや……」

音姫「なら、弟くん」

うん……… 确实だね

義之の音姫フラグ、木っ端微塵にしちゃいました〜(^o^) /

音姫（後書き）

読んで頂いているみなさまにまず感謝を

できれば、感想の方を書いていただけると駄目作者は喜びます

面倒かと思いますが、感想の方を宜しく願いますm（）（）m

朝

悠二 side

どうも。何の因果か、二度目の小学校生活を送ることになった水無月悠二です

音姫「ほら、弟くん。早く行こうよ」

由夢「そうだよ、早くいかないと遅刻しちゃうよ?」
義之「お兄ちゃん、早く!」

あれから、もう二年です

すっかり、音姉の性格も明るくなり、それに比例するように由夢や義之もよく笑顔を見せるようになった

やっぱり、笑顔が一番だよな、うん。

あ、そうそう…そろそろリリなの無印が始まる時期だな

おそらく、関わることになるだろう

まあ、その事はあとで…

俺は小学年だ

あれから、いろいろ大変だったぜ

具体的にはさくらが俺を職場に連れていこうとしたり、さくらが抱きついて来たり…

さくら関係ばかりだな…

まあ、ほかにも言えば音姉や由夢が俺の部屋のベッドに潜り込んでくることだな

…下手をすると理性が飛ぶ
おっと、話がそれだな

音姫 & amp・由夢「弟くん（お兄ちゃん）」

「ど、どうしたんだ？2人とも」

いつのまにか、二人の眼のハイライトが消え失せ、単色と生っていた

…顔は笑顔なんだけど目が全然、笑っていない

音姫 & amp・由夢「ほかの女の子の事、考えてたでしょ？」

「ソ、ソシナコトハアリマセンヨ？」

義之「なんで片言？」

ええい、南無三！

「大丈夫だよ、俺はどこにも行かないから」

音姫「う、うん／＼／＼／」

由夢「約束だよ？／／／」

「ああ」

え、何をしたかって？

ただ頭を撫でただけですよ

いつも、こうやってやると音姉も由夢も機嫌が直る

なんでだろう？

義之「お兄ちゃん、鈍感なんだね」

うるさい、未来のお前みたいに俺が鈍感なわけないだろ？

義之「だって…」

音姫「……えへへ／／／／」

由夢「……／／／／／」

義之は二人に目を流すと

義之「だってねえ…」

「それでも俺は鈍感なんかじゃないんだああ！…」

俺の魂の叫びが木霊する

「はあ、はあ」

音姫「ほら、早く行こうよ！」

「あ、ああ」

やれやれ、なんかこの世界に来て疲労は倍ぐらいになった気がするよ……

ま、それぐらいでここに居られるなら易いもんだな

うん、そう思う事にしよう

ガラガラガラ

俺と義之が教室に入ると、一瞬視線が集まったがすぐに全員が雑談に戻っていく

「よいしょっと」

義之「お爺ちゃんみたいだよ？」

いいんだよ、義之

俺はもう二十歳（精神年齢）だから…

？「おはよう。悠二くん、義之くん」

俺の斜め後ろ…つまり義之の隣から挨拶が来る

義之「おはよう、小恋ちゃん」

「おはよう、小恋」

そこに座っているのは原作キャラのひとり、月島小恋だ

ほんとに不思議だけど、毎回同じクラスになり、席も何故か近い

……俺は原作の小恋ルートは見てないからな、よく解らんのだけだな

「今日はなんかあったっけ？」

小恋「ううん、なにもないよ。」

義之「そっだねえ」

「ま、なるようにしかならんだろ」

義之「お兄ちゃん…」

義之がなにか言ってるけどキニシナイ

ガラガラガラ

再び、扉が開き初老の教師が入ってくる

小恋「あ、先生が来ちゃったね」

「だな」

そういつて、俺はランドセルから取り出す振りをして王の財宝から
大学の参考書を取り出す

なんでかって？

そりゃ、貴方

俺は曲がりなりにも高校生だった人間ですぜ？

小学校の勉強なんて退屈で退屈でorz

寝るのも良いけどそれをするとな成績がなんとも言えないことになる

そつなつたら俺は確実に音姉、由夢、さくらの三人にOHANAS
Iにあう

……それだけは嫌だ（ガクガク）

小恋「どうしたの？」

「い、いや。すこしトラウマを思い出しただけさ」

義之「ああ、アレね…」

小恋「義之くんも知ってるの？」

義之「う、うん」

アレは地獄だ

出来るなら、二度と受けたくない

はあ

やれやれ

朝（後書き）

とりあえず、駄文にお付き合い頂き有難うございます！！

悠二「で、なんで俺が呼ばれたんだ？」

いや、ほかの作者様に習わせて頂いたんだ

悠二「なら、すこしはましな文を書け」

……努力します

悠二「んなことはどうでもいい。さっさと感謝しろ」

あ、ああ

龍賀様、感想ありがとうございます！！

悠二「あれ？前回感想を書いてくれたのは？」

俺の悪友だからスルー

悠二「さいですか」

うん

駄目な作者ですが感想をいただけるとものすごい嬉しいです！！

では、また次回で！！

昼

悠二 side

キンコーンカーンコーン

そんな間の抜けた音がしてやっと退屈な授業時間が終わった

時間は12時半

昼飯時だ、

俺達の通っているこの小学校には給食はない

だから、みんな弁当だ

小学校でそれはないと思うが、まあ元が元だからな

しかし、俺にはない。かといって昼飯が無いわけでもない

何故かって？

その内、分かりますよ

ガラガラガラ

ほれ、きた。

扉がひらき、いつもの二人が顔を出す

音姫「弟くん」

由夢「お兄ちゃん」

と、こっぴつ訓だ

俺が弁当を作ろうとすると必ず容器が行方不明になる
でも、昼飯時になると中身満載の【それ】をもった音姉達が俺の教室にくる

ま、俺としては旨い飯が食えるから文句はないんだけどな

義之「お兄ちゃん、嬉しそうだね」

「ああ」

それから、俺達は小恋、義之、俺に音姉、由夢で昼飯を食べ始めた

他愛ない会話、その間に見せる純粋な笑顔

音姉や由夢達には申し訳無いんだがら、どうしても距離をおいちゃう

こいつらの微笑みは……俺には眩しすぎた

音姫「どうしたの、弟くん。ぼうつとしたりして」

「いや、なんでもねえ」

音姫「そう……」

俺は…水無月健太はこんな温もりとは無縁だった

だからかもしれない…

いや、きっとそうなんだろう

俺は…失うのが怖い

「いまの幸せが、まるで薄氷の上に成り立っているような気がして…」

止めよう、こんなこと考えても鬱になるだけでなんの利益もない

と、そんなことよりもさきに殺ることがあるな……うん

クラスの男子「……じー……」（水無月、殺す！！）「……」

毎回毎回でもう慣れてしまったが、むさい野郎共からの殺気がすごい

……最初なんて思わず王の財宝ゲートオブバビロンの中の宝具を一斉掃射しそうになっちゃいますた

てへっ

………すみません、自分で言っというて吐き気がしましたorz

義之「きにしないのが一番だと思うよ？」

そのなかでハハハと乾いた笑みを浮かべた義之が疲れたように呟く

「はあ」

やれやれ、殺るか…（誤字に非ず）

音姫「どうしたの？疲れたみたいな顔して…はい、あ〜ん／＼／＼」

自分の箸で掴んだおかずを差し出す音姉

「あ〜。音姉、自分でたべれ…」

俺は最後まで言えなかった

何故か？

それは…

クラスの男子「『水無月！死に去らせえ！』」

クラスの男子達のむさい魂？の叫びに遮られたからだ

いまにも、野郎共は俺を撲殺せんと鈍器（どこから持ってきたんだろつか？）を構えている

「はん、殺れるもんなら…」

またしても、俺は最後まで言葉を紡げなかった

なぜなら

音姫∓由夢「……………（ニッコ）」

隣の二人の背後になにか生命に直結するような恐怖を覚えたから…

クラスの男子「ひい…」

さっきまで殺気だっていた男子たちはまるで蛇に睨まれたウサギのように硬直し、ガタガタと震えている

音姫& amp・由夢「私のお兄ちゃん（弟くん）をどうするのか
な？かな？」

なぜにその口調？

ただ、突っ込めない。突っ込んだら殺られる……

音姫& amp・由夢「弟くん（お兄ちゃん）、すこし用事ができ
ちゃったみたいだからすこし待っててね」

「あ、ああ」

俺はただ、うなづくことしかできない

音姫& amp・由夢「じゃあ、すこし、OHANASSIしようか
？」

ああ、ご愁傷さま…

それから、クラスの男子達は音姉と由夢に引きずられ、教室を出た

……いくら自業自得とはいえ同情を禁じ得ない

義之「お兄ちゃん」

「ああ、音姉達は起こらせないようにしないな……」

義之「うん……」

クラスの男子「……ぐあああああああ!?」「」「」

その日、俺達の校舎にクラスの男子達の悲鳴が響き渡ったとか響かないとか……

ご愁傷様

昼（後書き）

後書きです

悠二「……………（ガタガタ）」

おい、大丈夫か？

悠二「か、かろうじて……………」

まあ、あの時の音姉と由夢は怖かったからな

悠二「あ、ああ……………」

今回は短かったですね

悠二「しかもグダグダの駄文だったな」

Orz

いいもん、どうせ俺なんて……………」

悠二「あ、拗ねた。ま、いいやその内、復活するだろ……………くたばっている作者に替わり、見てくださっている皆様に無上の感謝を！！」
シヤナの作者さまの奴をパクってんじゃない……………」

あ、次は特訓の予定です

また駄文になると思いますが見て下さると嬉しいですので
できれば良いので感想を御願います

では、また次回に

修行

無人世界

本来なら、人はおろか、動くものの一匹すら存在しない荒野のみで構成された世界

だが…

悠二「……………」

さくら「……………」

いま、そこには二人の少年と少女が相對していた

悠二 side

「トレスオン 投影開始」

投影するのはここ数年ですっかり使いなれた陰陽一對の夫婦劍【干将】【莫椰】

身に纏うは赤き弓兵と同じ聖骸布【赤原礼装】

目の前に立つさくらは黒い紋章の付いたマントを纏い、パルチザンのようなデバイス【ルナ】を構えている

さくら「行くよ」

そう宣言するのと同時に姿が消え突きの嵐が俺を襲う

非殺傷とはいえバリアジャケットのない俺は一発でも当たれば確実

にダメージを負うだろう

ただし、当たれば……だが
ガキнгаキン

さくらの突きを双剣で往なしていく

ガキнгаキнгаキнгаキнгаキнгаキン

何十回と打ち合う……が

さくら「ふっ!!……はっ!!」

さくらの突きの速度に変化は現れない

「はっ!!」

剣を投擲する

別に自棄になつたわけではない

剣がさくらに当たる寸前

フロークンファントasm
「壊れた幻想」

その言霊を唱えると同時に後ろに下がる

そして

ドゴオオオン

先程投擲した双剣が爆発した

プロテクションファンタズム
壊れた幻想

これも赤い弓兵の十八番

当たればダメージは少なくない……が

さくら「やっぱり反則だよね、悠くんの希少技能^{レアスキル}」

さつきも言ったがそれは当たればの話だ

煙が晴れるとそこには桜色のシールドをはり、無傷のさくらが立っていた

……あの一瞬で【プロテクション】を張ったのかよ

「それを意図も容易く防いだ奴に言われたくないよ」

苦笑を浮かべながら、俺は手に弓と矢を投影する

さくら「なら、てい！」

ルナ『シューティングスター』

可愛い掛け声とは裏腹に十数発もの魔力弾をはなつさくら

あれだけの数をいちいち撃ち抜いてたんじゃ埒が空かない……なら

俺は弓と矢を破棄すると

「トレスオン
投影開始」

いま、俺が瞬間的に投影できる剣の本数は二桁後半

最高で98本

しかも、宝具ではないモノであることが条件だ

宝具込みなら、投影するより王の財宝ゲートオブパピロンを使った方がよほど建設的だ

いま、投影した剣は50本

「行け!!」

それらを弾幕のようにはなつ

そして、魔力弾と交差する寸前・

「フロークンファンタズム
壊れた幻想」

先程と同じように剣に内包された魔力を暴走させ、爆発させる
でも

さくら「隙だらけだよ」

さくらの追撃が迫る………が

「どづかな？」

瞬間的に投影した大剣で防ぐ

さらに

「開け、ゲイトオブパビロン王の財宝」

さくらの周囲と英雄王の倉とを繋ぐ

そこから覗くのは無数の剣や槍などの刃

さくら「はあ、僕の敗けかあ」

「やれやれ、やっとここまで使いこなせるように成ったか…」

開いていた王の財宝ゲイトオブパビロンを閉じる

ルナ『悠二くんも凄いですね、デバイスも無しにマスターと互角に渡り合うなんて』

さくらのインテリジェンスデバイスのルナがそんなことを言ってくれる

さくら「そうだよな、たった三年で追い越されるなんてね…」

そう、俺はあれからさくらに戦闘に関することをいろいろと教わっていた

驚いた事にさくらは【リリなの】世界のランクで言うところのSSS+

の魔導師で管理局の囑託魔導師をしていた

にしても、いくらデバイスが無い上にリミッターがかかっていると
いってもチートの俺と互角以上って、どうよ？

しかし、いい加減俺もデバイスが欲しいぜ…

？「そんな貴方に朗報です」

つと、この声は

「よう、優衣か…」

最近、なにやら忙しいらしいで連絡がなかった神…改め優衣だった

あ、ちなみに優衣ってのはあいつの名前で神様のくらいとしてはあ
の大神ゼウスだった

大神の癖にフランクなヤツだ

優衣「やっとシャルティエの人格をサルベージできたのよ」

「そりゃ、お疲れさん…で、どれくらいになる予定だ？」

優衣「あと二週間って所かな」

「そっか、ありがとな」

優衣「いえいえ、では」

「ああ、じゃあな」

念話を切ると

さくら「どうしたの？」

「いや、なんでもない。さて、もう帰るか」

さくら「うん」

ようやく、武器を投影した時に流れ込んでくる英霊エミヤの経験を
使いこなせるように成ってきた

最初は頭では避けれているのに体がついていかないと悲しいこ
とに成ってたからな……

やれやれ、こんど固有結界や宝具の真名解放を試してみますか…

さくら「悠くん、いくよ〜」

「ああ」

そうして、俺は家に戻っていった

ちなみに俺達が修行してるのは夜中だ

やり過ぎると寝不足を引き起こす

……今度、ネギまのあの【別荘】を出すか…

蔵の中に中にも一つくらいは有るだろ……多分

修行（後書き）

後書きです

悠二「今回はさくらとの模擬戦だったな」

うん、せっかくチート能力なんだし…それに…

悠二「それに…なんだ？」

戦闘を書きたかつたんだああ！！

悠二「のくせに駄文だな」

o r z

悠二「落ち込んでいるダメ作者は放っておいて、龍賀さま、連続で感想を書いていただいております！」

よければ、悠二の奴をこきつかって下さい

悠二「こら、ダメ作者！！」

フフフ、ではまた今度お会いしましょう！

星光との出会い(前書き)

ちよつと短いです

星光との出会い

三ヶ月後

悠二side

キングクリムゾン!!

……… 申し訳、ネタに走りましたm(____)m

とりあえず、季節は春と夏の間

いま、俺はなんとか音姉や由夢を説得し、海鳴市に来ている

シャル『時刻は昼の12時時ですね、魔力反応はなし』

あ、コイツは一週間ぐらい前に来た俺のデバイスの『シャルティエ』

しかし、なぜに宅配便？

……… クロネ ヤマト？

シャル『どうするんですか？坊っちゃん』

「とりあえず、野宿のできるところを探すか……」

シャル『お金は無いんですか？』

「あるけど、さすがに9歳児じゃあな…」

シャル『ですよ〜』

そうなんだよ…

俺は心は二十歳以上でも体は9歳のコナン状態だ

こんなのを泊めてくれると頃なんて有るわけ無い

…この場合はお金があってもなくても関係ないのだ
そんなとき

信号無視のトラックが眼に入る

そして

?「え？」

その先には一人の少女

シャル『坊っちゃん!!』

「ああ！」

パチン

「世界【ザ・ワールド】時よ、止まれ！」

俺は幽波紋『スタンドザ・ワールド』で時を止める

シャル『十秒が限界です!』

「わかった!ガードスキル【デイレイ】!」

エンジェルビーツの奏が使っていたガードスキルを使い、高速移動で少女を抱き抱えると

シャル『3、2、1……タイムアップ』

「そして時は動き出す」

……なんとなくかつこつけてみました

少女「……」

ありゃ、気絶しちまってるよ……

シャル『仕方ありませんよ、起きるまで待ちますか?』

「ああ」

にしても、ぶつつけ本番だったけど『ザ・ワールド世界』とガードスキル【デイレイ】が発動してよかった

シャル『発動しなきゃイタかったですけど……』

……

十分後?

少女「う、うん」

「起きた？」

少女……なのはは眼を醒ました

そして

なのは「ふえ？私、たしかトラックに……あれ？貴方は？」

なのはの頭にクエスチョンマークが何個も浮かんでいる

「まあ、俺は水無月悠二。その、なんだ無事で良かったよ」

なのは「貴方が助けてくれたの？」

「まあ、そうなるな……」

なのは「あ、ありがとうございます……」

「ああ。気を付けろよ？世界は善意だけじゃないんだから……」

なのは「あ、あの……」

いつのまにか、なのはが俺のコートを掴んでいた

そして

なのは「お礼がしたいので家にきてくれませんか」

…なごじや

星光との出会い（後書き）

ギャアアアア！？

悠二「なんてもんおくつてくれてんのさ！？」

や、やべえ。悠二！？

悠二「ああ、起きろ【エア】そして全力全開！」

エヌマ・エリシユ
天地乖離する開闢の星！！

ふう、なんかなくなったな…

悠二「ああ…」

で

悠二「なんだ？作者」

悠二くん、なんでそのエアを仕舞わないの？

悠二「お礼参り」

ちよ、悠二！？

エヌマ・エリシユ
天地乖離する開闢の星

龍賀さま！！ 逃げてえ！！

邂逅・・・そしてシスコン

悠二 side

どうも、偶然？未来の魔王さまの命を救ってしまった水無月悠二です
あれから、適当に自己紹介を済ませた俺達は高町の実家に向かって
いる

「そうか、高町の実家は喫茶店をやってるのか」

なのは「うん、そうだよ あと、名前で読んでほしいな」

……この世界の女の子はフランクすぎる

普通、初対面の相手に名前で呼んでなんて言うか？

答えは否だろう

はあ、俺は内心ため息を突きながら

「なのは……これでいいのか？」

なのは「うん」

やれやれ、叶わんな

シャル『良い子ですね』

ああ、良い子だ。そして、純粹だ

……俺が失ってしまったもの

そして、取り戻せないもの

なのは「どうしたの、悠二くん」

「いや、なんでもないよ」

なのは「着いたよ……」

一瞬、ほんの一瞬だったが…なのはの表情が曇る

なのはの両親が経営している喫茶店【翠屋】

ちよくちよく、雑誌やなにかで目にする結構な有名店だ

俺も、一度行って見たかった……が

シャル『…あまり良い空気じゃありませんね』

ああ

なのは「ここはね、私のお父さんとお母さんがやってるんだ……」

そう話すなのはの顔は言い知れないぐらいに悲しいものだった

……恐らく、いまだに【あの時】の事を気にしてるんだろう

シャル『土郎さんが怪我した時の事をですか？』

ああ

「入るか？」

なのは「うん」

カラカラカラ

？「いらっしゃ…なのは…どうしたの？」

なのは「うん、それがね…」

なのはの事と呼んだ女性…：彼女がなのはの母親【高町桃子】

話しには聞いていたが、信じられないくらいに若い

これで子どもを三人も産んでるんだからな…

桃子「そう、貴方がうちのなのはを…」

どうやら、なのはの事情説明が終わったようだ

…ご都合主義全開だな

まあ、こんなダメ作者じゃ仕方ないか

作者「メタ発言は自重しろ！」

だが断る！！

自重したら俺じゃない！

士郎「ありがとう、君のおかげで」

いつのまにか、士郎さんや美由希さんも着ていたようだ

まだ救いは、あのシスコンがないことだろうか

士郎「ところで・・・君は武術か何かをやっているのかい？」

そんな質問が飛んできた

ああ、そういえば二次創作で出てきたな・・・

裏設定で御神・・・なんたらっという小太刀の剣術を使っつて

作者「すみません、とら八は知らないもので・・・」

「まあ、我流ですけどね」

士郎「そうか」

我流・・・とっていいのかわからないな・

俺の剣術や戦いの根本は武器とともに投影する使い手たちの経験や
技の模倣だ

俺オリジナルの改良？は加えられているが、オリジナルとはいえない
だろう

桃子「立ち話もなんだから、座りましょう」

士郎「そうだな」

桃子さんの提案に頷き、空いている席に座る

士郎「ところで、君はどこにすんでいたんだね？」

「初音島ですよ。」

桃子「そんなところにすめるなんてうらやましいわね」

なのは「ねえねえ、お母さん」

桃子「なに？」

なのは「初音島ってどんなところ？」

桃子「私もよくは知らないけど、一年中桜が枯れないって聞いているわ」

ここは俺が説明したほうがいいな

「ここもあっちも特には変わらんよ。さきほど、なのはのお母さんも言ったとおり、桜が一年中咲き誇っている。」

なのは「綺麗そうなの〜」

たしかに綺麗は綺麗だが、さすがに毎日だと飽きてくるけどな

士郎「で、なんで初音島からここまで？」

さて、ここからが問題だ・・・

「すこし用事がありましたね」

桃子「・・・お母さんたちは？」

「いませんよ。・・・ここにきたのも俺一人です。」

あ、やべー！

なのは「じゃ、じゃあどこで生活していくの？」

・・・

士郎「まさか・・・野宿か？」

美由希「まさか、父さん。そんなわけ・・・」はい「ええええええ！？」

そこらへんでテントでも張って暮らそうと思っていたからな・・・

ん・・・

なにか士郎さんと桃子さんがひそひそ場なしをしている・・・

いったいなんだろう・・・

士郎「悠二君・・・よかつたらその用事が終わるまで、うちに来ない

か？」

「へ？」

なのは「それがいいの！」

なんてこと言っちゃってやがるんですか？

この万年新婚夫婦は・・・

「遠慮・・・し」「じいじいじいじい」・・・

頼む、なのは

そんな表情で俺を見ないでくれ・・・

ざ、罪悪感が

「わかりましたよ、ご厄介になります・・・」

桃子&士郎「ああ(うん)」「」

そして、時刻は夕方

キングクリームゾン！！

・・・二度ネタになってしまった・・・orz

とりえあえず、あれから俺の滞在する部屋に案内され、今俺は海鳴市を見て回っている

なのは「ここはね〜」

それになぜかついてきているのは・・・

俺は一人で大丈夫だといったのだが、ついてくると聞かなかったの
で俺が折れたんだ

なのは「悠二君、わかった？」

「ああ、ありがとな。なのは（ニッコッ）」

なのは「う、うん／＼／＼／＼／」

なぜか、なのはの顔が赤い・・・

風邪だろうか？

季節の変わり目は風邪を引きやすいからな・・・

「少しごめんよ」

なのは「ふえっ！？」

コッソ

ふむ、熱はないな・・・

なのは「／＼／＼／＼／」

にもかかわらず、なのはの顔はさらに赤くなっている・・・

なにしたんだって？

ただデコとデコで熱を測っただけだ

「大丈夫か？」

なのは「う、うん。大丈夫なの／＼／＼／＼／＼（か、顔が近いの／＼／＼／＼／＼）」

「ならいいや、行くぞ？」

そういつて歩き出す

なのは「ま、まってなの〜」

一通り、回り終え・・・家に入ると

？「貴様か！！なのはに手を出したという輩は！！！」

といきなり小太刀（模造？・・・いえいえ、真剣ですよ）とさっきを向けてくるシスコン一名

なのは「ふえ・・・お兄ちゃん!？」

「あなたがなのはのお兄さんの恭也さんですか・・・」

恭也・・・基シスコン「貴様にお兄さんと呼ばれるいわれはない！！！」

あ・・・うぜ

でもなんで、こんなシスコンに彼女がいるのかが不思議だ

うん

恭・・・シスコン「道場にこい・・・いいな!!」

そういつて肩を怒らせて去っていくシスコン

ああ・・・

戦闘フラグが立っちゃったよ・・・

桃子「ごめんなさいね。うちの恭也が・・・」

「気にしないでくださいよ・・・いい理由ができました」

桃子「理由？」

「ええ」

そう、理由だ

リア充をボッコボッコにしてやんよ

なのは「悠二君、怖い・・・」

なのはは後に語る

邂逅・・・そしてシスコン（後書き）

あとがきです

悠二「にしても、あのシスコンは異常だろ・・・」

ああ

しかも戦闘フラグ立てちまったからな・・・

悠二「戦う俺に身にもなれ！！このダメ作者！」

うるさい！！

悠二「で、どうするんだ？お前、とら八どころか・・・なのはの原作すら見てないんだろ？」

ああ・・・

悠二「でも、何で見ないんだ？」

ラブがない！！・・・男がない！！・・・百合ってる！！

悠二「・・・さいですか・・・って、最後のは違っただろ！！」

まあ、それはさておき

悠二「スルーですか！？」

みなさまにお願いがあります

先ほど述べたとおり、作者はとら八どころか、原作すらみていません
シスコンの使う業やその詳細などを教えていただけたら幸いです

悠二「結局人任せかよ・・・」

龍賀さま毎度感想ありがとうございます!!

・・・ついでに志音もな

悠二「ついでなのかよ・・・」

うん・・・ついで

では、また次回おあいしましょう!!

悠二「あと、感想のほうもよろしくお願いします。こんなダメ作者
ですが感想をもらえたら多少はよくなると思われます・・・では!!」

御神の剣士

悠二 side

恭也「準備は良いか？」

あれから、シスコンに道場へと連れ込まれた水無月悠二です

やれやれ

「投影開始【トレースオン】」

使い慣れた【干将】と【莫耶】を投影する

もちろん、刃は潰してあるよ？

恭也「っ！？どこからだした!？」

「まあ、手品みたいなもんですよ。気にしないでください」

そう言っつて双剣を構える

やれやれ、俺はチートなのにあんまり勝てる気があんまりしないな…

恭也「ほお、君も双剣を使うのか？」

「まあ、なんでも使えますがね」

俺はいろいろな得物を使えるようにしたのは只単にその方がカッコ

いいし、なによる戦闘に有利だからだ

そして、俺には王の財宝や無限の剣製もあるからな

ゲートオブバビロン アンリミテッドブレイドワークス

使えて損と言うことはない

恭也「……行くぞ!」

「こい!」

恭也…墓、シスコンは手に持った二振りの小太刀で斬りかかってくる

速い…

並みの剣士なら瞬殺できるほどに…だが!!

ガキン

恭也「!」

さくらの突きに比べれば雲泥の差だ

「どうした?それがほんきですか?」

わざと挑発的に呟く

恭也「……言ってくれるじゃないか」

口調こそ変わらないが、まとう気配

具体的に言つと殺気が強くなる

やれやれ

「こんどはこっちから行きますよ!」

瞬

ガキン

恭也「速い!」

しかし、小太刀に受け止められる

「まだまだ!」

恭也「くっ!」

ガキンガキンガキンガキンガキンガキン

何十合と打ち合う

俺の斬撃はさくらの刺突ほどは速くないからな

恭也「てやあ!」

「っち」

俺はチートだが、このシスコンも充分チートだ

俺の斬撃を捌いて、そのうえに反撃まで加えてくるなんて……

やれやれ

恭也「君はほんとに何者だ？……ほんとに六歳か？」

「六歳ですよ、ただチートなね」

恭也「そうか……」

その瞬間、シスコンの姿がぶれる

神速……だったかな

士郎 side

一体、あの子は何者なんだ

あの歳で恭也と互角に打ち合うなんて……

美由希「恭ちゃん、本気だよね？」

「ああ……」

いま、目の前で繰り広げられている打ち合い。

そこで恭也は御神流の技を幾つも使用している

射抜きしほき

徹とあし

雑旋なぎつむじ……そして貫ぬき

並みの剣士なら、これだけの技をかわす事は元より、防ぐことすら出来ないと言つのだ…

悠二「は！……ふっ！」

目の前の、それもなのはと同じ六歳の子がそれをやってのける…

彼は自分は我流だといったが、その通りだろう

でも

美由希「なんだか、ぎこちないね」

美由希も気付いたみたいだ

彼の動きには才能を感じる

磨けば……いや、今でも十分なくらいに強い

だが…

彼の戦い方にはまるで才能がない

我流…といったが、師匠がいるのだろう

その師匠は二流の動きで一流の戦いをやる男なのだろう

「むっ」

美由希「恭ちゃん!？」

恭也の奴、神速まで使ったのか

でも

「トレスオン投影開始……物干し竿」

彼は 先程の双剣を投げ捨て、新たに2mほどの長刀をだした
それを構えると

悠二「秘剣……【燕返し】!?!」

一瞬、三つの光が【同時】に煌めく

……恭也の負けだな

悠二side

「秘剣……【燕返し】!?!」

咄嗟に投影した物干し竿大の木刀を投影して、放つ

恭也「ぐは!？」

アサシンのサーヴァント、佐々木小次郎の奥義【秘剣・燕返し】

三つの斬撃を同時に放つ

それはf a t eの世界では多重次元屈折現象とも言われる奥義だ

キシユア・ゼルレッチ

一の太刀で退路を断ち、二の太刀で動きを封じる

そして三の太刀が相手を切り裂く

絶対不可避

「俺の勝ちですね」

物干し竿を首に添える

恭也「ああ、俺の敗けだ…っ!?!」

「っ!?!」

突然、生命の危機を感じる殺気が3つ…3つ!?!

なのは「お兄ちゃん？」

恭也「な、なのは!?!」

恐る恐る、そちらのほうに顔を向けると…

音姫& a m p・由夢「「弟くん（お兄ちゃん）になにしてるのかな
?かな?」「」

そこにはとつてもいい笑顔をした義姉と義妹がたっていた

恭也「な、なのは！？これには訳が…」

なのは「うん、だからOHANASIIしよつか……」

恭也「え！？」

そして、三人にズルズルと引きずられていくシスコン
さまあww

恭也「ギャアアアアアアア！！」

その夜、シスコンの悲鳴が高町家に響いたとか…

にしても、なんで音姉達がこっちに来てるんだ？

御神の剣士（後書き）

後書きです

悠二「…（ガクガク）」

今回もすこしトラウマが刺激されちまったみたいで震えています

龍様、カガヤ様、龍賀様、アイデア並びに感想、ありがとうございます
ました！！

今回の最後に龍様のアイデアを使わせて貰いました

カガヤ様、アイデアを頂いたのに使えなくて申し訳ありません

龍賀様、シスコンの技に関しての資料、ありがとうございます！！

ささやかですがお礼の品をお送りします

悠二「なに渡したんだ？」

とりあえず、デビルメイクライの魔剣リベリオンとアラストール

悠二「龍賀様が知らなかったらどうすんだよ！！」

あ！

悠二「忘れてやがったな…」

と とりあえずあしがとひいげんまもー！

ではー！

師匠（前書き）

ああ・・・

・・・かなりぐだぐだになっちゃいました・・・すみません

師匠

悠二 side

シスコンを滅多滅多にして遣ったぜ！！の水無月悠二です

いま、そのシスコンというと…

恭也「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

なのは、音姉、由夢の三人によるOHANASIIによって再起不能な程にダメージ（精神的な）を負っていた

「で、なんで音姉達がこっちに来てるんだ？」

音姫「弟くんが行ったからだよ」

「俺を追って？純一さんは？」

由夢「お祖父ちゃんは留守番だよ」

「にしても、よく純一さんはOKをだしたな…」

音姫「OHANASIIしたらすぐにOKしてくれたの」

ああ…、純一さん。本当にすみません

帰ったらなにか奢ります

音姫 & a m p · 由夢 「そんなことよりこの子は誰なの？」 「

「ああ……」

俺は二人にここに来てからの経緯を話した

すると

なのは「悠二くん、この二人は誰なのかな？」

「この二人は俺の家族みたいなモノだよ」

音姫「朝倉音姫です」

由夢「朝倉由夢です」

なのは「高町なのはです。なのはって呼んでね」

さてつと、こいつらは大丈夫だな…今度は…

士郎「……」

こっちか…

士郎「君は何者なんだ？」

「言ったでしょ？俺はすこしチートな六歳のガキですよ」

まあ、精神年齢は違うけど、嘘はついていない

「そうか…」

あまり、納得してもらえていない様子だ

音姫「ねえ、弟くん」

そんなとき、不意に音姉が声をかけてきた

「どうしたんだ、音姉？」

音姫「弟くんはこれからどうするの？」

「とりあえず、この家に厄介になろうかと…」

音姫「じゃあ、私達と一緒にだね」

由夢「うん」

「……なんでぞ？」

おもわず、某正義の味方を目指した少年の口癖を言ってしまった俺はきつと悪くはない

「どういうことですか？桃子さん」

桃子「彼女たちは貴方の家族なのでしょう？なら、いいじゃない」

そんなことをしれつと言いつ

士郎「あきらめろ、桃子がこうなっては手がつけられない」

・・士郎さんも苦勞したんですね・・

「んじゃ、お世話になります！」

桃子「はい」

そうして、俺は一時的にはとはいえ、高町家に居候することになった

しかし、見ず知らずのおれたちを止める何て・・

ほんとにそれでいいのか？

俺は失礼な疑問を抱えながら、迎え入れられた

その夜

あれから、俺たちの歓迎会ということで桃子さんが盛大な夕飯にしてくれた。そして、なのはやそれに触発された音姉や由夢と一緒に風呂に入ろうといわれ、回避したら回避したで精神的なダメージから回復したシスコンに殺氣と小太刀をぶつけられた

あ、シスコンは桃子さんがとてもいい笑顔で連れて行った

そして、今は俺一人で道場にいる

勝手に入ってはいけないと思ったが、すこし体が動かしたかったからである

それに

「トレスオン
投影開始」

投影するのはいつもとおなじ【干将】と【莫耶】

・・・今日のシスコン・・・基、恭也さんとの試合

たぶん、土郎さんには気づかれただろ

おれの違和感・・・

おれの動きの基本はエミヤシロウのそれだ

しかし、俺自身は優衣のおかげでチートになっている

つまり、一流の才能をもつものがあえて、二流の動きを模倣している

そんなちぐはぐになってしまっているはずだ

ほかの剣術や槍術はともかく、俺が好んで使うのはこの双剣だ

あの時はとっさに物干し竿と同じぐらいの長さの木刀を投影し、それで【燕返し】を放った

そうでもしなければ・・・きつと俺は・・・

「??」こんな時間にどうしたんだい？」

俺が思考の海に沈んでいた所為で気付けなかったみたいだ

いつのまにか、道場に士郎さんが来ていた

「なんでもないですよ。」

そう言っつて、手に持っていた干将と莫耶を破棄する

すると一対の夫婦剣は魔力素となり、消える

士郎「君は不思議の塊だな・・・」

「そうですね・・・」

自分としても自覚ぐらいはある

士郎「ところで・・・君に師はいるのかね？」

やはり・・・気づいている・・・

「ええ。いました・・・が正確でしょうけどね。お察しのとおり、俺の師匠にまったく才能はなかった。だけど、まごうことなき一流の剣士でした」

直接的な教えはこっていないし、実際にあってわけでもない

でも・・・彼は俺の師だ

士郎「それは・・・」

士郎さんもわかっている

二流の動きで一流の戦いをする・・・それは・・・あり得ないことではない

だが、その後ろには想像を絶する鍛錬と、あまたの実践を経て完成するものだ

士郎「君には・・・才能はあるみたいだけど？」

「師匠も、そう言っていましたよ・・・」

士郎「君は・・・なんでそんな目をするんだ？・・・まるで・・・まるで人を殺した者の目を・・・」

やっぱり、気づかれちゃうか・・・

「ハハハ、それは簡単。俺が人を殺したことがあるからですよ・・・」

そして、俺は士郎さんに転生のことや、俺の前世のことを話した
すると

士郎「・・・すまん。きみがそんな・・・」

「気にしないでください。・・・」

士郎「だが、わすれないでくれ。君は一人じゃない・・・それをな」

「はい・・・」

俺は・・・一人じゃない・・・か

・・・

部屋に戻った後も、その言葉がいやに頭に残っていた

師匠（後書き）

とりあえず、士郎さんだけには悠二の過去を知ってもらいました

悠二「なんの意味があつたんだ？」

いや、士郎さんの疑惑を晴らそうと思ひましてね

で、あとはその後みたいだね

悠二「でも、相変わらずの駄文っぷりだな」

o r z

悠二「こんなバカ作者は放っておいて、龍賀さま、カガヤさま、龍さま、感想ありがとうございます！」

つぎはとりあえず、学校編の予定です

悠二「学校って、まさかおれも!？」

うん

悠二「ふざけるなあ!！」

うるさいぞ

輪転する勝利の剣【エクスカリバー・ガラティーン】

悠「ぐはああ!?!」

では、また次回お会いしましょう!!!

朝・・・そして・・・(前書き)

主人公設定を一番前にしたので、よかったらどうぞ

朝・・・そして・・・

悠二 side

「う、ううん・・・」

どうも、なんか最近妙に厄介事に巻き込まれている気がしてならぬ
い水無月悠二です。

あれから、部屋にもどりさっさと寝ました

そして翌朝、起きてみると

なのは「う〜」

何故か、俺に抱きつくようになのはが眠っていた・・・

・・・なんでさ？

OK

すこし状況を整理しよう

昨日、一人で寝た 起きたら何故か隣になのはが寝てる

シャル『坊っちゃんか寝た後に後に潜り込んできたみたいですね・・・』

成る程・・・にしても

「ほら、なのは。起きろ！」

なのは「うにゃあ?」

こいつは学校なのだ、さつさと起こさなければ学校に遅れてしまう

「さつさと起きねえと学校に遅れちまうぞ?」

なのだ「あ、悠二くん。おはよう」

「ああ、おはよう」

そして、俺はここでの初めての一日が始まった

桃子「あ、悠二くん。おはよう」

「おはようございます、桃子さん」

シスコンや土郎さんがいないのは鍛練だからだろう

音姫「あ、弟くん。おはよう」

由夢「お兄ちゃん、おはよう」

同じような口調で朝倉姉妹もくる

そして、しばらくしてシスコンや土郎さん、そしてなのはが来て、朝食が始まった

……料理？

普通の和食ですよ

魚の干物に味噌汁、そんでほうれん草のおひたし

オーソドックスなのにうまい

そんな旨い料理に舌鼓を打っていると

なのは「ねえねえ」

「どうした？なのは」

コトッ

飲んでいた味噌汁を置いてなのはの方に目を向ける

なのは「悠二くん達って、学校はどうするの？」

「まあ、俺は無いな。音姉たちは？」

音姫「えっ？弟くんも一緒だよ？私達はこっちの私立聖祥大学付属に留学扱いになってるんだよ」

由夢「だからお兄ちゃんも一緒！」

「マジか？」

音姫 & amp · 由夢 「マジだよ」

はあ、鬱だ・・・死のう

なのはside

「ふふ」

？「どうしたのよ、なのは」

？「なにか良いことでもあったの？」

「アリサちゃん、すずかちゃん。うん」

今日は悠二くんが来るの

同じクラスだったらしいなあ

アリサ「あ、先生が来たみたい」

ガラガラガラ

そんな音を立て、私達の担任の先生が入ってきた

先生「今日はこのクラスに新しいお友達が増えますよ」

生徒「せんせーい、それは男の子ですか？女の子ですか？」

それは私も気になってたの…

先生「男の子ですよ。入ってきてください」

ガラガラガラ

再び、そんな音が響き、金髪で青い目をした彼が不機嫌そうな顔を
して現れたの

悠二「水無月悠二です。よろしく」

女子「かわいい〜」

女子B「女の子みたい〜」

むう、なんか胸がむやむやするの…

先生「じゃあ、席は高町さんの隣で…」

悠二「はい」

そう言っつて、悠二くんが歩いてくる

悠二「よろしくな」

「じい」

今日は朝から良いことが合ったの

悠二 side

あゝ、鬱だ

あれから、先生の粋な計らい？で質問時間になり、クラス中の子に質問攻めにされた

アリサの奴が止めてくれなきゃヤバかったぜ…

「はあゝ、疲れた」

なのは「にやはは、悠二くん大丈夫？」

「大丈夫じゃない…朝っぱらからクタクタだ」

机に突っ伏していると

アリサ「あんだ、なのはの知り合いだったのね…」

ツンデレの代表格・くぎみーボイスのあの人が声をかけてきた

またの名をバーニングアリサこと、アリサ・バニングスだ

アリサ「なんかあんだ、失礼なこと考えなかった？」

「イエイエ、ソナコトハアリマセンヨ？」

なのは「なんで片言なの…」

「まったく、どいつもこいつも人の心読みやがって

心を読むのはなかなかだけで十分だったのに

アリサ「私はアリサ・バニングスよ。よろしく、水無月」

「悠二でいいよ。俺は名字はあまり好きじゃないんだ」

すずか「でも、水無月っていい名字だと思うけどな」

「君は？」

「あ、私は月村すずか。よろしくね悠二君」

しかし、予想していたとはいえこっちにきてまっ先にこいつらとの
エンカウトとか・

なにか、得体のしれないものの介入を感じざる負えないな・・・

作者「くしゅん！・・・だれか俺の噂でもしたのか？」

・・・なにか、得体のしれない電波を受信したが気にしないでおう

うん、気にしたら負けだ

「月村さんにバニングスさん・・・」

アリサ&すずか「名前と呼んで（呼びなさい）」

・・・やっぱりですか

あなたたちも俺にそんな苦行を押し付けるのですね・・・

わかりましたよ、呼べばいいんでしょ・・・呼べば!!

「んじゃ、アリサ、すずか・・・よろしく」(ニコッ)

とはいえ、笑顔を出してしまうあたり、自分はもろいなあ〜と実感
してしまうんだけどねorz

ん

アリサ&すずか「う、うん／＼／＼／＼／＼(え、笑顔は反則だよ
)(反則よ!)

ありゃ、こいつらもか・・・

風邪か？

なのは「むっっ」

なのはなぜ唸っていたが、俺にその理由がわかるわけもない・・・

なんか風邪が流行っているな〜

俺も気をつけないと・・・

キンコーンカンコーン

と、そんなときにちょうどチャイムが鳴り、教師が入ってくる

やねやね・・・寝るか・・・

朝・・・そして・・・（後書き）

悠二「フフフフ」

ゆ、悠二君？

悠二「なんだ？作者・・・」

その手に握っているとなんでもないモノは？

悠二「こいつか？・・・こいつはな・・・御礼返すためだ」

やっぱり・・・

悠二「と、いうわけだ。喰らえ！！」

エクスカリバー・ガラティーン
輪転する勝利の剣

悠二「ついでにこいつらも持っていけ！！」

フルンディング
赤原猟犬&偽・螺旋剣（カラドボルグ？）

送りすぎだ！！

悠二「ふふふ、大丈夫さ。」

あっそ、龍賀さま。感想ありがとうございます！

そっちの主人公をうちの馬鹿が呼び捨てにしてみましたけど、よかったですかね？

では、次はお昼です！

悠二「まさか・・・」

そう・・・知る人ぞ知るあの組織が動き出します！！

ヒントは人の幸せは毒の味・・・です！

悠二「わかる人いるかな？」

・・・いることを切に願う・・・

昼食とFFF団

悠二side

キンコーンカンコーン

そんなありきたりな音とともに授業は終わった

なのは「悠二君はお昼どうするの、お弁当?」

「ああ。」

俺はバツクに手を突っ込むふりをして、王の財宝【ゲートオブバビロン】から作って置いた弁当を取り出す

蔵の中は時間の概念なんて存在しないので、作りたてで温かい

ちなみに俺が作りましたよ?

前世の都合で料理スキルのなどはあるんですよ

音姉「弟くん」

由夢「お兄ちゃん」

「あ、音姉たちも来たのか」

さすがに学年は違うから大丈夫だろうと踏んでいたが・・・ダメだったらしい

さて、俺は静かに・・・

なのは「……………」

な、なのはさん？

音姉「じいじいじいじいじい」

なのはがおれの服の裾をつかんで離さない

音姉に至っては涙目＋上目遣いというさいきょう最終兵器を繰り出してきた

悠二は精神的に無量大数のダメージを負った・・・

目の前が真っ暗に・・・ならねえよ！！

はあ、もう・・・

「一緒に食うか？」

音姉&なのは「うん」「」

そう俺が提案すると、二人は満面の笑みを浮かべる

か、かぁいいいじゃねの・・・

アリサ「じゃあ、屋上に行きましょうか」

屋上か・・・まあ、ここよりは幾分かましだろ

「嘘だと思っんなら食べてみる、ほれ」

なのは「う、うん」

アリサ「そうだね、食べて確かめれば・・・」

すずか「いただきます・・・」

パクッ

三人ほぼ同時におれの弁当を食べる

3人「「「っ！？」」「」「」

悠二「どうだ？」

多少は自信、あつたんだが…

なのは「美味しいの…」

すずか「うん…」

アリサ「ほんとにアンタが作ったの!？」

「ああ…」

どうしたんだ？

アリサ「負けたわ…」

すずか「うん」

なんか、三人がダメージを受けてるし…

何故？

アリサ「で、この子達は誰？」

って、今頃かよ…

音姫「私は朝倉音姫。学年は弟くん達の二つ上だね、で、弟くんのこいび「義姉だ」うん」

由夢「朝倉由夢です。学年はみなさんのひとつ上でしたですね。あと、お兄ちゃんは渡しません」

「俺はいつからお前の物になった？」

なのは& amp;音姫「由夢ちゃん…負けないの（負けないよ）」

由夢「私だって！」

俺のは無視ですか…

そして

？「」「」「きりきりまー！！」「」「」

「あんたら、だれ？」

いつのまにか、屋上の扉に鈍器（どこから持ってきた？）を構えた
無数の男子達

FFF団「……我ら、モテるやつは許さない。裏の風紀委員異端
審問会だ！」「……」

え

マジー？

なんでFFF団！？

って、んなこと驚いている場合じゃない

FFF団「逃がすとも？」

ヒュン

「なっ！？」

いつのまにか、俺の両手に縄が掛けられる

この程度の……縄……

……

5人「……悠二くん（悠二、弟くん、お兄ちゃん）をどっにつ
れていくのかな（の）？」「……」

やばい、恐怖で体が…

FFF団「……え!?!?」「」「」

5人「……OHANASIIしょうか?」「」「」

FFF団「……ひつ!?!?」「」「」

5人「……じゃ、逝こうか(逝きましようか)」「」「」

そうして、FFF団は5人の魔王?に連行されていった

……哀れ

FFF団「……ぎゃあああああ!?!?」「」「」

……その後、校舎に連中の悲鳴が響いたとか響かないとか…

昼食とFFF団（後書き）

悠二「斬り決る戦神の剣【フラガラック】かよ」

ありゃ、迎撃に関したら一級品だからな…

悠二「にしても輪転する勝利の剣【エクスカリバー・ガラティーン】が防がれるとは…」

ついでに偽・螺旋剣【カラドボルグ?】と赤原獵犬【フルンティング】もな…

まあ、いいや

今回はどうでしたか？

悠二「駄文なのは変わらないし、なによりグダグダだな」

o r z

悠二「救いようのないないダメ作者だけどこれからもよろしく。」

それはさておき、龍賀さま、感想ありがとうございます!!

では、また次回!!

悠二「じゃあな!!」

正義の味方 前編

悠一 side

いつもの昼飯時間

俺はなのはや音姉と食べていた

いつもは他愛のない話をして、みんなで笑い会つのだが、今日はすこし違った

……と言つてもシリアル……じゃなかった、シリアスではない

ななは「将来かあ……、アリサちゃんたちはもう結構決まつてるんだよね？」

そう、さっきの授業で将来の事が話題になつたんだ

アリサ「あたしはお父さんもお母さんも会社経営だから、勉強して跡を継がなきゃ、つてぐらいだけど？」

すずか「私は機械系が好きだから、工学系の専門職がいいな……つて思つてるけど？」

おいおい、普通の九歳はそんな事考えねえぞ？

……俺なんて7年後ですら思い付かなかつたと言つのに

音姫「私は普通に結婚して、幸せに過ごせればいいかなあ……」

由夢「私は…わかんない」

…これが普通の反応ではないか？

アリサ「そういえば、悠二は？」

すずか「悠二くんにはなにか成りたいものとかあるの？」

成りたいもの…か

一瞬、脳裏に浮かぶ【あの人】の影

俺は…

「正義の味方…かな？」

音姫「…（ビクン）」

アリサ「正義の味方って、あなた…」

「わりい、忘れてくれ」

正義の味方

一を切り捨て9を救う人間

幻想だが、それは事実

音姫「弟くん？」

「…正義の味方の成の果てか…」

それは悲惨なモノだった

救ったものに裏切られ、ついには世界にすら裏切られる

すずか「悠二くん？」

それが、正義の味方の末路

「ああ、大丈夫だ。すこし、可愛い子の前でかっこつけたかっただけだ」

我ながら、くさい台詞だと思うよ

5人「ㅋㅋㅋㅋか、可愛いノノノノ」「」「」

……俺は…何になりたいんだ？

なのはside

悠二「正義の味方……かな？」

私達が将来の事を話していると、悠二くんがそんな事を呟いたの

……正義の味方？

よく、アニメとかでやってるアレ？

アリサ「正義の味方って、あんだ……」

アリサちゃんが呆れちゃってる……でも

悠二「……………」

なにかを考え込むように黙ってしまった悠二くん……………なぜだか、その目は悲しそうだったの

そして、不意に

「……………正義の味方の成の果てか……………」

悠二くんがなにか呟いたのでも、なにをいつているかまではわかりません

ただ、私が気になったのは、悠二くんがすごい寂しそうに見えたから……………」

その夜

悠二side

「はっ！！……………てい！！！」

深夜の管理外世界。

主に俺やさくらが訓練用に使っている無人世界だ

人所か、生物の一匹すら居ない荒野の世界

そこで俺は双剣をふるっていた

しばらく、それを続ると

「トレースアウト投影破棄……はあ」

溜め息と一緒に干将と莫耶を破棄する

「……」

そして、己の姿を省みる

黒い革のボディーアーマーに紅い聖骸布の外套

さくらと訓練するときも決まってこの服装だ

やっぱり…俺が目指しているものは……

シャル『坊っちゃん』

「……なんだ？」

シャル『坊っちゃんは何を悩んでいるんですか？』

「……」

シャル『正義の味方…貴方は昼間、なのはさん達に聞かれてそう答えましたね』

「ああ」

シャル『それにその服装……貴方は、自分が正義の味方エミヤンロウのようになつてしまつのではないか？

…そして、貴方はそれん…』

「シャル、黙ってくれ」

やっぱり、シャルには見通されてたな…

シャル『…………御自分を赦せとは言いません、ただ貴方と正義の味方^{エミヤシロウ}は違う…………それだけは覚えておいてください』

「ああ…………^{トレスオン}投影開始」

それからも、俺は鍛練を続けた

槍・鎌・弓。

いまの俺では、あいつらを守るだけの力はない

だから…俺は強くなる

すべてを…………守れるほどに

そして、しばらく体を動かし、転移で家の中のトイレに移動し部屋
(客間)に入ると

なのは「…………」

なのはが居ました

…………なんでさ？

正義の味方 前編（後書き）

すみません、作者のテンションが下がrippぱなしなので感謝と今後の予定だけを書かせて貰います

志音さん、感想ありがとうございます

読んでくださっている皆様に無上の感謝を

三万PV突破……テンションが戻ったらなにか記念にやります
では

正義の味方 後編

なのはside

ガチャ

夜遅く…

そんな時間に疲れたような顔をした悠二くんが帰ってきたの

まず、驚いたのはその服

黒い革のボディーアーマーに紅い服

悠二「なのは、なんでこんな時間までおきてんだ？」

「悠二くんとお話したいから」

悠二くんはすこし笑うと

悠二「別に構わないぜ…トレースアウト投影破棄」

そう、悠二くんが呟くと紅い服はどこかに消え、いつもの黒と白の服に戻る

そして、ベッドの上に座ると

悠二「で、なにが聞きたいんだ？」

「こんな時間までどうしたの？」

悠二「道場で体を動かしていただけだ」

そして、黙ってしまっ

ど、どうしよう

聴きたい事はあるのに、聴けない…

そんなとき

悠二「正義の味方ってなんだろうな？」

え？

正義の味方？

「正義の味方？」

悠二「ああ、正義の味方だ。」

正義の味方…

「みんなを助ける人の事じゃないの？」

悠二「ああ、正義の味方ってのは十のうち、一を捨て、9を救うモノがそう呼ばれる」

「そんな…」

悠二「これは極端な話だ。だが、俺は思うんだ。
正義の味方は常に自分を殺す」

「えっ!？」

悠二「ふう、話が過ぎたな…もう寝ようか」

なのは「う、うん」

そう言っつて、悠二くんはさっさと布団に入って仕舞ったの…

そして、

すうすう

寝るのが早いので、もう寝息をたてて…

それに…／＼／＼／

悠二くんの寝顔…可愛いの／＼／＼／

だから、今日ぐらいは良いよね？

私は悠二くんを起こさないようにベッドに潜り込みました

「フフ、お休みなさい」

今日はいい夢が見れそうなの

そして、その夜

私は私の運命を決める夢を見ました

(た、たすけて…ください。こ、この声が聞こえるなら…)

悠二 side

寝てる振りをしていて、なのはが潜り込んできた

やれやれ

……正義の味方が

俺はそれになれるのか？

俺は……大多数を救うためにはアイツ等切り捨てる^{かぞく}ことができるのか？

体を剣に

心は硝子に…

……

「I am bone of my sword」体は剣で出来ている)」

……いくら、自問した処で答えはでない

もう、寝よう

そんなとき

(た、たすけて…ください。こ、この声が聞こえるなら…)

淫獣……基、ユーノからの念話だ

さて、始まるのか

なら、俺も動きだそう

正義の味方…

それを見つげるために

音姫 side

今日のお昼の弟くん…なにか変だった

まるで…なにかに迷っているみたい

ガチャ

悠「」すっすっすっ

なのは「」すっ

む

なんでなのはちゃんが寝てるんだろ…

私だってしたいのに…

ガチャ

由夢「あ、お姉ちゃん」

「由夢ちゃんも？」

由夢「うん…まさか、お姉ちゃんも？」

「……………」

由夢「それになのはちゃんまで…」

「しょうがないよ、弟くんだし」

由夢「お兄ちゃんだもんね」

私たちは諦めに似た納得をしながら、弟くんのベッドに潜り込む

「あたたかい」

由夢「うん」

そっだよね

弟くんが悩んでるなら、支えてあげなくちゃね

だって…私と弟くんは一心同体なんだから

そんなとき

（た、たすけて…ください。こ、この声が聞こえるなら…）

そんな声が聞こえた気がした

正義の味方 後編（後書き）

悠二「……………ZZZZZZ」

悠二の奴が熟睡してしまっているので今日はゲストをお呼びしました

さくら「はーい、最近出番のない芳乃さくらだよ」

ということでダ・カーポ？の芳乃さくらさんです

さくら「で、リオンくん。なんで僕の出番がないのかな？」

そ、それは貴方には役割があるからですよ

さくら「まさか、悠くと戦うとかないよね？」

……

さくら「ナンデソコデダマルノカナ、カナ？」

ひ！？

さくら「少し、アタマ冷やそうか？」

ギャアアアアアア！？

さくら「悪は滅んだの

では、龍賀くん、感想ありがとう リオンくんによると、次はつ

いになのはちゃんか！？」

で、では！

さくら」「じゃあねーノシ」

みなさま、よかったら感想の方をお願いします！

不屈の心

悠二 side

「うっん…?」

ありゃ、体が動かない

…なのほか?

俺が自分の体に目を落とすと

音姫「うっん」

由夢「……zzz」

あれ?

なんでこいつらがいるんだ?

俺が目を落とすとそこには俺に抱きつくように眠っている音姉と由夢がいた

「……なんでさ?」

俺が某型月の主人公の口癖を言ってしまった俺はきつと悪くないはずだ

しかし、まさかリンカーコアがあるとはいえほんとにユーノの夢

を見るとはね・・・

あんまり野郎の夢を見ても嬉しくは無いもんだ

どっちにしても見るなら女の子の夢が良い

そう思うだろ？

あんたもどうも

それから俺たちは普通に登校し、普通に授業をうけた

え？

寝てるのが間違いじゃないかって？

・・・ソナナコトアリマセンヨ？

ゴホン、そしてお昼

なのは「ねえねえ、悠二くん。私ね、今日変な夢を見たの・・・」

そんなことをなのはが入った

そして

「どんな夢だ？」

なのは「私と同じくらいの男の子が何か変な化け物に襲われたの・・・」

「
音姫「あ、私も見たよ！」

由夢「私も！」

なっ!?

なのはだけじゃ無くて音姉や由夢まで!?

いや、予想できないわけじゃない

なんせ俺たちが暮らしていた初音島めとこだからな・

現にさくらの特大のリンカーコアが存在するからな

「まあ、気にすることは無いだろ・・・ただの夢さ」

なのは「う、うん・・・」

やれやれ、遂にか・

めんどくさい事にならなきゃいいけどな・

アリサ「あんた達、なにはなしてんのよ!!--」

「なんでもないよ。」

すずか「そういえば、なにか手紙をもらってたよね？」

「へ!？」

な、なんですかがそのことを知っているんだ!？」

見つけたら速攻で天照アマテラスで焼いたのに・・

なのは「それってどういふこと?」

音姫「弟くん?」

声は出さないが、アリサやすすかも背後から黒いオーラを出している

まるで・・そう・・幽波紋スタンドだ

や、やばい・・

いくらチートな俺でも今の状態のこいつらには勝てる気がしない・・

Orz

なのは「悠二くん・・どうするの?」

「断るよ」

それを聞いて、ふうと安堵する五人

そして

なのは「その女の子にはOHANASIしなくちゃ」

・・・なんと物騒なことを呟いていたが、気にしないで置こう・・

気にしたら負けだ

アリサ「それにしても、悠二ってモテるわよね」

すずか「まだこっちに来てあんまり時間が経ってないのにね」

「ああ。まったく、俺はモテるなんて世も末だな」

それを聞いて、はあと呆れたようにため息をはく五人

おいおい・・・なんでさ？

時間は過ぎ、放課後

なのは達は熟へ、俺は裏山にきている

別に特段的に意味は無い。

「トレスオン投影開始」

使い慣れた双剣を投影するとそれを構える。

シユンシユンシユン

それで素振りを繰り返す。

投影時に俺に付加されるエミヤの経験を思い返すように

そして、それを俺の身に慣らすように

そして、それを小吉時間ほど繰り返すと双剣を破棄する

そして

「トレスオン
投影開始」

弓と換れた剣を投影する

やれやれ・・・

「I am bone of my sword」我が骨子は換れ
狂う」

シャル『結界展開』

シャルが結界を展開してくる

「カラドボルグ
偽・螺旋剣！！」

ビュン

放たれた矢は貫き、目的の大樹をたやすく貫く

そして

「ブローケン・ファンタズム
壊れた幻想」

はなつた矢を爆発させる。ほうっておくと、あの矢は結界すら貫く
今なら、よほどの高ランクの真名開放でなければ連続しなければで
きるようにもなった

これで、無印なら何とかなるだろ・・

気が付くと、すでに日も落ちていた

「結構長い時間やってたんだな・・」

シャル『そうですね・・』

やれやれ・・行きますか

俺は赤い弓兵と同じ外套をまとうと

「トレース
同調・・開始」

足に魔力を集中に、駆け出す

俺がつくと、まだ始まってはいないようだ

俺が来たのは動物病院

俺はすこし用事があるからといって、高町家のみなさんには了承を
取ってある

夕飯は王の財宝ゲイトオブパピロンにつめている食料でなんとかした

しばらく待っているとなのはが来て、あのジュエルシードの暴走体が姿を見せる

そして

なのは「セーッとアップ!」

レイハ『Set Up』

あ、変身した

シャル『すごい魔力ですね』

「ああ。」

そう答えながら、俺は弓と普通の矢を投影する

こんなのでいちいち宝具を使ったらきりが無いからな

??「ぐわああああ!」

つちい、なんともKYな獣だ

弓での後方援護だけの予定だったが、そうともいつてられんらしい

「投影開始トレスオン・・・そして同調開始トレスオン」

干将と莫耶を投影し、そして全身を強化する

そして

「大丈夫か？なのは」

なのは「ふええええ！？」

不屈の心（後書き）

悠二「またか！・・・光満ちるところに我あり、黄泉の門開き時に汝あり・・・堕ちろ、神の雷！！」

悠二「！？」

悠二「インディグネーション！！」

ふう、なんとかなったな・・・

悠二「やれやれ、龍斗ファイツにも困ったもんだな・・・」

ただ楽しんでるでしょ？

悠二「まあな」

やれやれ・・・これだからチートオリ主ってのは・・・

何は兎も角、龍賀さま・感想ありがとうございます

やっと原作に入れました！！

ではまた次回！！

番外編 大英雄との決闘（前書き）

時間軸的にはなのは達に会い前です

番外編 大英雄との決闘

悠二 side

俺はいつも使っている管理外世界に来ていた

なにをしに来たかって？

そりゃ、たまには本気を出したいからに決まってるでしょ

シャル『坊っちゃんの本気を出すと、世界がなくなりますからね…』

なにか、シャルが言った気がするけどきにしない

シャル『相手はどうするんですか？』

ん、そうだ！！

「トレスオン
投影開始」

投影するのはかつて、大英雄と呼ばれた英霊の斧剣

ナインライブス
射殺す百頭

シャル『ナインライブス
射殺す百頭って、まさか！？』

「うん、そのまさかさ！…こい、ヘラクレス！！」

ウィン

鈍い音と一緒に魔方阵が形成され、射殺す百頭を媒体に英霊の呼び出す

？「ん…ここは…」

現れたのは下半身だけに鎧をつけた黒い肌の巨人

「よう、ヘラクレス」

ヘラクレス「私が呼び出されたと言うことは聖杯戦争か？」

「いんや、違う。すこし頼みたいことがあってね」

ヘラクレス「頼みたいこと？」

「ああ。すこし俺と闘ってくれ」

ヘラクレス「は？」

ヘラクレスは鳩が豆鉄砲を食らったような顔をする

…なんか、俺の抱いていたイメージとは違うな

ま、生来優しい奴だった事は知ってるけど

ヘラクレス「フフフ、面白いことを言うマスターだ。」

そういつて、俺が投影した斧剣を取ると

ヘラクレス「それがマスターの望みなら、我が全身全霊をもって応

えよう」

「ああ。投影開始」
トレスオン

相手はギリシャ神話の大英雄

生半可な宝具は効かない

「シャル」

シャル『……わかりました。手出しはしません』

……話が早くて助かる

さて、なにを投影だすか？

決まった…

「投影完了」
トレスオフ

投影したのはかの騎士王の聖剣

約束された勝利の剣
エクスカリバー

「じゃあ、御教授ねがいますかね」

それを構える

ヘラクレス「行くぞ？マスター！！」

ヘラクレスの巨体が走る

……その体躯に不釣り合いに早い

「トレスオン
同調開始」

全身を強化し、尚且つ腕と足に重点的に魔力を回す

ヘラクレス「ふん！」

ガキーン

ヘラクレスの斬撃を…

「ぐっ！」

重い…

だが！

受け流し…

「はっ！」

斬り込む

しかし

ガキーン

ヘラクレス「ふ」

それは敢えなく斧剣に受け止められる

すげえ

正直にそう思う

さすが、大英雄なだけあるな…

やれやれ…

ヘラクレス「マスター」

「なんだ？」

ヘラクレス「マスターはまだ幼い。そこまでして、なぜ力を求める？」

ふ、愚問だな

「守りたいもの、救いたいひとがいる、だからさ…」
ヘラクレス「失言をお詫びする」

「気にすんな」

にしても、よくセイバーアルトリアはコイツヘラクレスとやりあえたよな…

はあ〜

「じゃあ、行くぜ！」

考えても仕方ない

ボン

足元で魔力を爆発させ、加速をかけてから

「おら！！！」

切りかかる

ヘラクレス「ふぬっ！！！」

ガキン

それを受け止めるヘラクレス

だが！

「エクスカリバー約束された勝利の剣！！！」

この零距离からの真名解放だ。

ヘラクレス「ぐう………」

しかし、まだ倒れない……か

「ロールアウトなら、バレットクリア工程完了、フリーズアウト全投影待機、フリーズアウト停止解凍」

これで！

「ソードパレルフルオープン
全投影連続層写！！」

ダダダダダダダダダダ

無数の剣郡がヘラクレスに向かう

しかし

ヘラクレス「射殺す百頭ナインライフス」

それらに向かい、己が宝具を放つヘラクレス

俺の剣郡とヘラクレスの射殺す百頭ナインライフスがぶつかり合い、お互いを相殺しあう

だが…これでいい

「I am bone of my sword <体は剣で出来ている>

Steel is my body, and fire is my blood <血潮は鉄で、心は硝子>

I have created over a thousand blades <幾たびの戦場を越えて不敗>

Unknown to Death <ただ一度の敗走もなく>

Nor known to Life <ただ一度の理解もされな
い>

Have withstood pain to created
many weapons・彼の者は常に独り 剣の丘で勝利
に酔う>

Yet, those hands will never ho
ld anything <故に、生涯に意味はなく>

So as I pray, unlimited blade
works <その体は、きつと剣で出来ていた>

世界が…塗り変わる

担い手を忘れた剣の墓標が広がる赤い荒野

地を走る炎。

そして、天を覆う無数の歯車

魔術のひとつの到達点にして禁忌

己の心象風景により現実を浸食させる固有結界
リアリティー・マップル

アンリミテッドブレイドワークス
『無限の剣製』

ヘラクレス「なっ!?!」

「さて、いまの俺でどこまでお前の命…削れるかな？」

（二時間後）

「はあはあ」

ヘラクレス「はあ」

やれやれ、十二ドゥエーティムの試練とか

明らかにあれはチートだろ…

ゲイトオブパレロン
王の財宝なしじゃ、こんなに時間と魔力を食うなんてな…

ヘラクレス「マスター」

「大丈夫だ」

ヘラクレスに魔力を注ぎ、再び現界させもう俺も闘えないので固有結界は解除する

ヘラクレス「マスターはまだ幼い、焦ることはない。」

「ああ」

ヘラクレス「では、私は上てんかいに行こう」

「優衣セウスによろしくな」

ヘラクレス「うむ」

そう言って、消えるヘラケレス

やれやれ、すこし実験のつもりが本気になっ^{マッ}ちまったな…

ま、楽しかったからいつか

…こんどまたやろつと

番外編 大英雄との決闘（後書き）

今回は座談会は休みます

理由は作者のテンションとネタ切れです

龍賀さま、カガヤさま感想ありがとうございました

カガヤさまに至っては前回に感謝を忘れてしまい、申し訳ありません
んm() m

では、失礼します() ()

狂い出す歯車

悠二 side

どうも、なんか最近悩みが増加する一方の水無月悠二です

いまは晴れて、魔法少女となったなのはのピンチを救っている最中だ

せつかく、赤原礼装をきているんだから、アーチャーらしく弓で行

こうかなあ

とか、思ってたら勝手に体が動き気づけば暴走体は目の前

……さすが幸運値E、半端じゃありません（関係ないぞ）

しかし、そんな事をばやいていても仕方ない

「はあ！」

ザンザンザンザン

気を取り直し無数に斬撃を叩き込む

・ だけど、斬ったそばから修復されるのであんまり意味は無いっぽい

だから！

「てやあー!!」

力一杯、蹴り飛ばす！！

え？

何の意味があるかって？

まあ、見ててくださいよ

ドゴオオオオン

蹴りをモロに食らい壁に衝突した暴走体。

回復する敵を倒す方法

それは！！

「トレスオン 投影開始…ロールアウト 全工程完了」

投影した剣が空中で尚且つ、暴走体を囲むように固定される

「バレットクリア 全投影待機…フリーズアウト 停止解凍…ソイドパレルフルオープン 全投影連続層写！！」

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ

簡単

相手に回復の暇を与えなきゃいいんです

放った剣群はどれも宝具には遠く及ばない魔剣、名剣、聖剣達だ

だが、侮るなかれ

その内に秘めし魔力は並みじゃない

暴走体「ぐわあ…」

まだ息があるのか…

あれだけの剣群をつけてまだ息があるとか・

ならべだ

「ブローケン・ファンタズム
壊れた幻想」

爆！！

俺の一言によって、剣の中に内包された魔力は暴走し、大爆発を起
こした

なのは「うにゃ！？」

ポフッ

なのは「ゆ、悠二くん／＼」

爆発の余波でよろけたなのはを支える

「封印を頼めるか？」

なのは「うん。レイジングハート！！」

レイハ『sealing mode setup』

なのは「リリカルマジカル…」

やれやれ、封印はなのはに任せてっと

「トレスオン
解析開始」

壊れた部分などの材質を解析して

「解析終了・・・投影開始」

投影魔術で破損した部分を補う

「トレスオフ
投影完了」

ふう…

魔術的になにもされていない物質の解析、投影なんて造作もない

それをみていたフェレットは

フェレット「あなたも魔導師だったんですね」

フェレット…基、ユーノが話しかけてくる

「俺は魔導師じゃない。」

ユーノ「じゃあ…」

「俺は魔術師であり、魔法使いだ」

ユーノ「魔法使い？魔術師？」

「ああ、それと君は？」

ユーノ「あ、僕はユーノ・スクライア。スクライアは部族の名前だから、ユーノって呼んでください」

なのは「私は高町なのはなの！」

「俺は水無月悠二だ。よろしくな、ユーノ」

ユーノ「はい！」

うんうん、いい返事だ

ユーノは淫獣だけど・・・まあ、性格は悪くない

どごそのKYよりよっぽどましだ

そんなことよりも

「さっきから除き見ている君達は誰だね？」

瞬間的に弓と矢を投影し、構える

「いい加減、出てきたらどうだ？」

建物の陰、そこからさっきから視線を感じていた…

敵意などは感じないけど・・・念のためだ

そして、そこから姿を現したのは意外な人だった

「なっ!?!」

なのは「音姫さん、由夢ちゃん!?!」

そこから、姿を現したのは音姉と由夢だった

それをみて、弓と矢を破棄はくすると

音姫「弟くん、さっきのはなに!?!」

音姉がそう疑問をぶつける

…が

ウィンウィン

折悪く警察のサイレンの音が聞こえはじめ

「話しは帰ってからだ。いいな?」

音姫「う、うん…」

音姉もさすがに警察のお世話にはなりたくないようだ

んじゃ、さつさとおさらばしますか

「トレスオン
同調開始」

足に魔力を微量流し、強化する

なのは「ごめんなさああい!!」

そんなこんなで無印は動き出した

……果たして、俺は俺の正義を見つけられるだろうか？

答えは……返ってくることはない

ただ闇と静寂があるだけ

狂い出す歯車（後書き）

さて、あとがきだ

悠二「どうしたんだ？リオン」

いや、すこしみなさまに知恵をお借りしたくてな

悠二「ああ、あの件ね」

うん、ということですがアンケート（のようなもの）を実施
させていただきます

意見をいただくのは

悠二「音姉と由夢のデバイス名とバリアジャケットのデザイン」

…です

選ばれた理由などをご記入の上、本作の感想までどしどしご応募
ください

なお、感想に対する返信はしませんので悪しからず

悠二& amp・リオン「よろしくお願いします！」「」

では、また次回！

ポニーテールと雷光

悠一 side

あれから、帰った俺たちは土朗さん達にすごい怒られてしまいました

それよりなにより・・・桃子さんのOHANASIIがこわい・・・(ガクブル

そんな夜が明け・・・翌日

朝起きた俺はすこし髪型を変えてみようと思います

シャル『どうしたんですか？いきなり』

「なんとなくだよ、なんとなく」

これは本当だ

シャル『で、どんな髪型にする予定ですか？』

「せっかく、髪が長いんだから、ポニーテールにでもしようかと」

一時期、髪を切ろうかと悩んだ時期もあったが、結局切っていない

俺は基本、ロングは好きだからな

シャル『いいじゃないですか？』

「うん、ありがとう」

シャルと会話しつつ、髪をポニーテールにする

そこで、聖祥の男子用の制服に袖を通し、下に降りると

桃子「悠二くん!?!」

まず桃子さんが固まり

士朗「悠二くんか!?!」

士朗さんが驚愕し

三人「きゅうつうつう／＼／＼／＼」

なのは、音姉、由夢の三人に至っては顔を真っ赤にしている

・・・なぜ?

シャル『坊ちゃん・・・鈍感なんですわね』

失礼な、俺は鈍感なんかじゃない・と思う・May Bee(多分)

そんなハプニングもあったが、無事に朝食を食べ終え、俺たちはスクールバスの停留所まで歩いている

音姫「ね、ねえ、弟くん。」

そんな中、若干挙動不審な音姉が話しかけてくる

なぜかおれのほうを見ないようにしている・・・

音姫「その髪型、どうしたの／＼／」

「ああ、気が向いたからやってみた・・・どっ?」

音姫「に、似合ってるよ・・・すぐく／＼／」

「そっか。ありがとうね(ニコッ)」

音姫「うきゅううう／＼／＼(か、可愛すぎるよ)／＼／＼(」

なんか、音姉が顔を真っ赤にして悶えている・・・

そして

なのは&由夢「むっ」「

その後ろの二人はなにやら不機嫌のご様子・・・

いつたいなに?

このカオスは

シャル『坊ちゃんが原因でしょうに』

・・・否定できないところが悲しい

そんな、軽くカオスな感じをしばらく続き、俺たちは停留所に着く

幸い、まだバスは来ていない

アリサ「あ、なのは！」

すずか「なのはちゃん、おはよう」

黒塗りのベンツから降りてくるアリサとすずか

こいつらは並じゃないくらいのお金持というやつだ

なのは「アリサちゃん、すずかちゃん。おはようなの！」

なのはもうれしそうだ

アリサ「あんた、だれ？」

「ひでえな・・・おい」

すずか「悠二くんもおはよう」

あ、すずかはわかってくれたみたいだ

夜の一族・・・だったかな？

たしか彼女は吸血種だったはずだ

まあ、それだから動向って気はないけどな

アリサ「え！？・・悠二？」

「そつだよ。正真正銘、水無月悠二だよ」

髪形変えただけでそう変わるもんかね・・

シャル『変わりますよ、リオン坊ちゃんの例を見てください』

あれは髪型というより、分け目を変えただけだろうが・・

まあ、印象くらいは変わるけどさ

音姫「あ、バスがきたよ！」

スクールバスも来たみたいだ

由夢「行く」

「ああ。」

「あれでほんとに男なのかしら」とかなにかアリサたちが呟いていますが、気にしない

気にしたら負けだ

うん

そして、時は過ぎ授業中

あれから、ユーノが全員に念話を教えたらしく

なのは（悠二くんのあれって魔法なの？）

さっそくなのはが話しかけてきた

（あれは魔法じゃない。魔術だ）

ユーノ（魔術？）

（ああ。）

なのは（その魔術であの剣とかを出してたの？）

（うん。おれの魔術は一度見た剣や槍といった武具の類を複製して、自分のものとして作り出せるんだ）

なのは（ふえ〜）

その様子だとあんまりわかっているようには見えないな・・・

ユーノ（稀少技能？）
レアスキル

（まあ、そのようなものだと思ってくれ）

本当は違っただけだね

投影魔術はおれの・・・いや、英霊エミヤの固有結界から零れ落ちた
リアリティ・マーブル
モノ

こちらでいう稀少技能とは些か違っただ
レアスキル

（おれのこととはこれでいいな。で、ユーノ。お前が探しているあの
青い宝石は何だ？）

ユーノ（はい・・・実は・・・

ユーノがジュエルシードに関する説明をする

俺は原作こそみていないが、二次創作で読み漁ったので知っている

・・・俺もこれからは気をつけないとな

俺が所有している宝具もひょっとしたらロストログリア認定されてしま
まうかもしれない

いや、それに関しては確定だろう

特に乖離剣エアや刺し穿つ死棘の槍なんかは確定だろう
ゲイ・ボルグ

干将、莫耶くらいなら問題ないだろうが・・・

ユーノ（どうしたんですか？）

（いや、なんでもなし。少し考え事をしていただけだ）

とにかく、宝具の使用はちゃんと考えないと・・・

音姫（・・・大体のことはわかったよ）

いままで、聞くだけに徹していた音姉が口を開いた

音姫（で、これからどうするの？）

ユーノ（はい。暴走する前にジュエルシードを確保できるのが最善ですけど、もし暴走してしまったら・・・）

なのは（その時は私が手伝うの！）

なのは・・・

ユーノ（いいんですか？）

なのは（うん）

ユーノ（では、よろしくお願いします）

由夢（私たちは何かできることないかな？）

（由夢や音姉はデバイスも持っていないからな・・・）

由夢（じゃあお兄ちゃんは持っているの!?!）

（へっ!?!）

やべ、シくつた

シャル『うっかりスキルですかね』

凜じゃあるまいに・・・

はあ・・・しかたない

（おれは持っているよ。）

シャル『坊ちゃんのデバイスのシャルティエです。はじめまして』

ユーノ（ほんとにあなたは何者ですか?）

ユーノが何やら呟いていたけど気にしない

さて、次はフェイトとのエンカウントでもしますか・・・

そして、放課後

シャル『坊ちゃん!』

「ああ。あつたな」

俺はシャルと放課後、なのは達には内緒でジュエルシードを探していた

原作?知識とチートなシャルの性能を便りに搜索していると案外、簡単に見つかった

そして

ブオン

人除けの結界が貼られる

予想より早いのですこし驚きつつ

目の前に現れる主従を見据える

??「あなたが持っているそのジュエルシードを渡してください」

金髪の魔導師・・フェイト・テストロッサとその使い魔・・アルフ

彼女らとの、初めての出会い

ポニーテールと雷光（後書き）

後書きです

……orz

悠二「どうしたんだ、いきなり」

……m () m

悠二「本気でどうした!？」

ああ、すまん。

すし、おちこんでた

悠二「感想がこないからか？」

うん…

ヘラクレスの話をいれてから一個も

悠二「見捨てられた？」

……そうでないと思いたい

前回にお願いしたアンケートは来週の今日までです

何卒、よろしくお願いします

悠二「感想のほうも頼む。小心者の作者は感想ひとつでテンション

が変わるからな。批評でも文句でもな
では、また次回

デバイス作成とフラグ

悠一side

??「あなたが持っているそのジュエルシールドを渡してください」
予想通りの言葉。

「ジュエルシールド、ってこれか？」
わざととぼけてみる。

??「はい」

「・・・上げてもいいけど・・・」

??「ほんとですか!!」

「すこし俺の相手をしてくれたらね!」

瞬間で投影した黒鍵を投擲する

??「っ!??」

『プロテクション』

当然、防御魔法で防ぐよな。

ま、これも計算のうち

「シャル!!」

シャル『了解!・・・setup』

一瞬、光に包まれ俺はクラウドの姿になる

もちろん、アドベントチルドレンのほうですよ?

わからない人はググるか、ディシディアでもやってくれ

??「フェイト!・・・この!」

獣娘が殴りかかってくるが、

「甘いぜ!」

投影した干将と莫耶でそれを防ぐ

??「フォトンランサー・・・ファイヤ!」

『フォトンランサー』

金色の魔力弾が飛んでくる・・・

誘導性はないので、たやすくよけられる

が

??「てやあぁあ!」

そこに獣娘の追撃

「っち」

干将と莫耶を投擲し

『ブローケン・ファンタズム』
「壊れた幻想」

爆！！

爆破する

しかし

??「てやああ！！！」

『フラッシュ・ムーブ』

デバイスを鎌してのフェイトの高速の攻撃

「くっ！！！」

とっさに投影した干将と莫耶で防ぐ

しかし、最後の攻撃はすこし予想外だったな…

「ふう、これくらいでいいだろ」

??「え！？？」

俺はシャルを解除すると同時に、ジュエルシールドをフェイトに投げる

??「いいんですか？」

「いいもなにも、すこし相手をしてくれたら渡すって言っただろ？」

??「あっ!」

・・・忘れてやがったな

「俺は水無月悠二、君は？」

フェイト「私はフェイト・テストロッサ。この子はアルフ」

アルフ「・・・」

ははは、アルフは警戒心ビンビン・・・

「んじゃ、俺は行くな。かわいいお嬢さん(ニコッ)」

フェイト「か、可愛いノノノノ」

アルフ「フェイト？」

なんか、フェイトが赤くなっていた気がするが気にしない

シャル『またフラグを立てましたね』

「そんなんで、立つわけがないだろうが」

シャル『……どうでしょうね。』

……大丈夫だよ、きっと

うん……そうだよね？

あなた方もまへそう思うでしょ？

作者「思わねえよ!!!……リア充爆発しろ!!!」

フエイトside

「可愛い／＼／」

アルフ「ほんとにどうしたんだい、フェイト。」

「なんでもないよ」

アルフ「なら、いいけど…」

さっき、私にジュエルシードをくれた女の子？

俺って言ってたから男の子かな？

なんか、不思議な子だった

どこが不思議といわれても困るけど、

「水無月悠二…か」

なんか、またどこかで会いそう…

ううん、また会えたらいいな

その夜

悠二 side

「これをこつしてつと」

シャル「これもいいんじゃないですか？」

「だな」

え？

今何をしているかって？

簡単ですよ

音姉や由夢のデバイスを作っているんですよ

俺の隣にいる銀髪の青年・・・まあ、会話でわかると思うが、シャルだ

どうやら優衣セウスの悪戯で人型になれるようになっていたそうだ

ただ、いまはそれに感謝したい

ちなみに並行して、俺用のストレージデバイスも作成を始めている

どちらもシャルの知識がなければできない

え？

場所？

ああ、高町家でやれるわけないでしょ？

だから王の財宝の中に入っていたネギま！のエヴァの別荘ゲートオブパピロンを使っている

ここなら、いくらでも作成に時間を割ける

シャル「坊ちゃん、それとってください」

「あいよ」

ちなみに俺のストレージはもうほぼ出来上がっている

俺が本物を見て、投影した複製品を素体にデバイスにくみ上げるだけだから、そんなに時間はかからない

数はいまのところ三つ

まあ、今度増えるかもしれないけどね

さて、そろそろ本格的にはじまるな・・

そんなことを思いつつ、別荘の夜空を見上げる

楽団は準備を整え、指揮者のタクトを待つ

まもなく・演奏は始まる

奏でるは悲しみの鎮魂歌か？

それとも歡喜の讚美歌か？

それは・神のみぞ知る

デバイス作成とフラグ（後書き）

ふう・・・

悠二「よかったな。みなさま感想をくれて」

ああ。

さて、今回ですが前回から引つ張ってきたフェイトとのエンカウントと、そして音姉たちのデバイス作成フラグでした

悠二「どんなデバイスになるんだ？」

それはみなさまのアイデアと俺の厨二脳しだい

悠二「あっそ」

そんでもって、今日は特別ゲストを呼んでいます・・・ほい！！

ボン

さくら「悠く~~~~ん」

という事で芳乃さくらさんです

すみません、ほんと出番が少なくて（土下座）

さくら「うん!?!?・・・」

悠二「ああ。こいつはDCのキャラの中でさくらが一番としているやつだからな。罪悪感があるんだろ」

さくら「うにゃ・・・僕は大丈夫だからね？」

ありがとう・・・

で、気を取り直して、さくら。感謝を頼むぜ

さくら「うん。えっと、竜くん、龍賀くん。感想ありがとう・・・特に龍賀くんがくれたアイデアにリオン君は驚いてました」

悠二「まだアンケートはやっているので是非お願いします」

うん

では、この辺で

三人「・・・ではまた次回!!」「」「」

日常2（前書き）

連続投稿ですので後書きはありません

日常2

悠二side

とりあえず、フェイトとのエンカウントから数日

今のところは順調？に集まっていると思う

いま、なのはとユーノは魔法の訓練をしている

魔力弾をあやつつたり、砲撃魔法を練習したりと・・・まあ、ぼちぼちやっています

とりあえず、基本的なことからやっているみたいだ

俺？

俺はそんなことする必要はない

なんせ、鬼ひんのしごきびを受けてますので

あいつさ、基本はやさしいんだけど、模擬戦になると手加減しねえからな・・・

最初のほうは俺がぼろぼろに負けてました

とはいえ、最初だけ

その時は俺が投影や、宝具の扱いができなかったとき

おっと、話がそれたな

とりあえず、暇なので弓を投影し、シャルが操作してくれる魔力弾を狙撃する

的は結構な速さでうごいているのでなかなか当たりづらい・・・が

「そこっ！」

今のおれなら苦勞することはない

ちょうど、五十射ほどで止めると

なのは「ふえええ」

ユーノ「すごいですね」

いつのまにか、ユーノとなのはが見入っていた

「お前ら、訓練はどうしたんだ？」

構えていた黒塗りの洋弓をおろしながらつぶやく

ユーノ「ひと段落ついたので少し休憩にしました」

シャル『坊ちゃんも休憩にしたらどうです？』

「そつだな」

弓を破棄すると・・・

「ほいっと・・・」

ゲイトオブパレロン
王の財宝からサンドイッチを取り出す

ユーノ「どこからだしたんですか？」

「それは企業秘密で」

あれから、ユーノが言うにはなのは驚くべきスピードで成長しているということ

まあ、そのあたりは主人公補正というやつか

まあ、あとすこし経ったらスターライトブレイカーみたいなチート砲撃を編み出すようなお方だからな・・・

なんせ将来の管理局の白い魔王だし・・・

シャル『白い悪魔じゃありませんでしたか？』

まったく、ファーストガンダムじゃないっての！

ユーノ「そういえば、悠二ってデバイスどうやって手に入れたの」

「ああ・・・知り合いの奴からもらった。まあ、これも企業秘密だ」

ユーノ「企業秘密って・・・」

ユ一ノは軽く苦笑しているが、こればかりは話せない

神様にもらいました・・・何ていえるわけないもんね

シャル『坊ちゃん、そろそろ時間かと』

「だな。帰るぞ」

なのは「うん」

俺たちが主に訓練しているのは早朝だ

朝の弱い、なのはを某エルロン家秘儀で起し、訓練している

え？

某エルロン家秘儀ってなにかって？

ググってください

士朗さんや桃子さんにはジヨギングと言って誤魔化してある

そうそう、なぜか俺の髪型がポニーで固定されちいました

それから崩すとなぜかみんな（おもになのはや音姉）が残念そうな顔をするからだ

・・・なぜ？

それから、普通に朝食を食べ終わり登校する

教室に入ると

アリサ「あ、悠二」

すずか「おはよう」

アリサとすずかが話しかけてくる

「おはようさん」

二人に挨拶を返し、席に着く

席はなのはの隣でアリサの後ろ・・・んでもってすずかのまえ

・・・うん。ご都合主義全開だな

ユ一ノ「きゅっ」

おう、そういやユ一のもきてたんだけ

「すずか「あ、ユーノくん」

「すずかに抱かれるユーノ

べ、別に羨ましくなんて無いんだからなっ!!

「なのは「えい!」

「ギユウ

「え!?!」

いきなり、なのはが俺に抱きついてくる

なぜ?

なのは「なんか悠二君が寂しそうだったから／＼／＼」

「・・・さいですか

「っていつか心を読むな!!」

「そんでもって離れる!!」

「ありがとな。でも恥ずかしいから離れてくれな／＼」

「やべっ

「若干、顔が熱い

なのは「う、うん（赤くなつた悠二君、かわいいの）」

アリサ「なのはだけずるい!!」

ギユ

「ア、アリサ!？」

な、なんてことだ

アリサがデレた!？

「はっ!？」

感じる殺気は・・・無数

FFF団「」「」「水無月悠二・・・さあ、貴様の罪を数えろ」「」「」

一糸乱れぬ動きで鈍器を鈍器を振りかざすFFF団くろいへんしつしゃ

「撤退!」

俺は神速よろしくな高速移動でこの場から逃げ去ると・・・

FFF団「」「」「まてええええええ!!」「」「」

と、後を追ってくるFFF団くろいへんしつしゃ

日常茶飯事とはいえ、これは疲れる・

はぁ・・・今日はどうやって難を逃れよう・

その後、俺はすずかにも抱きつかれ、また追われる羽目になったのは別のお話

・・・うん、あとで一あいっら（FFF団）にはOHANASSIが必要なようだな

そして、教室に戻ると

男子「くくくく・・・」（ガタガタガタガタ）「くくく」

なのは「あ、悠二君」

アリサ「ほら、先生来るわよ!」

小さくなり、震えている男子と妙に晴れ晴れとした表情をした三人

・・・いったい何があったんだ?

覚悟 前篇

悠二side

今日は土朗さんのコーチ兼オーナーを務めるサッカーチームの翠屋FCの試合日

俺はなのはとアリサ、すずかと一緒に応援に行くことになってるんだが・・・

なのは「うにゅ・・・」

案の定、俺のベッドに潜り込んだのはがなかなか起きない

「おら、さっさと起きろ！」

なのは「うにゅ・・・あと五分！」

・・・こりゃ駄目だな・・・

しかたない・・・

「トレスオン投影開始」

投影するのはなんの変哲もないオタマとフライパン

「シャル、防音結界を頼む」

シャル『了解』

SIDE:なのは

「う〜〜〜／／／」

悠二君の起こし方は少し乱暴なの

う〜、まだ耳はキーンってするの・・・

悠二「唸っても謝んねえぞ。寝てたお前が悪い」

な「でも〜…」

「でもじゃねえ。もう試合は始まってんだぞ？」

な「ええ！？ま、待ってなの！」

「おら、さっさといくぞー！」

悠二君はひとりですっさと行ってしまっ

な「もうう、悠二くん待ってよ〜！（涙）」

悠二「待たん！」

そんなムカつくぐらい清々しい宣言が聞こえた気がするの・・・

試合会場に着いてみるともう後半が始まってしまてちたの・

アリサ「なのは！悠二！遅いわよ！」

アリサちゃんに怒られる

「ごめんごめん…」

悠二「んで、どうだ？」

すずか「えっと…今は0対0だよ。キーパーの人が頑張ってるから
点は入ってないけど、こっちは・」

アリサ「全然シュートを打ててないのよ！」

それじゃ…このまま引き分けなのかな？

その時…

ドサツ… ピピーツ！

三人娘「！！？」

いきなり…フォワードの人が倒れて試合が止まった

いったいどうしたんだろう！？

悠二side

俺は女子たちとは離れ、すこし土郎さんのところにいた

ふと、メンバー表を見ると

「控えが・・・いない!？」

本来なら二、三人は補充要員としていたはずなのにいない

それを聞いた土郎さんは

「ああ、そのせいか無理してプレイしてる子が何人かいるんだ」

苦々しそつにつぶやく

その時・・・

ドサツ… ピュー!

なにかの転ぶ音と、審判の笛が鳴り響く

悠二&土郎「!?!?」「」

畜生、いやな予感が当たりやがったぜ・・・

俺は土郎さんと協力してフォワードの人をベンチまで運ぶ

大事はねえな・・・

しかし、この試合はムリポだな・・・やれやれ

たまにはサッカーもいいか・

「よかつたら、俺が出ましようか？」

士朗「え！？・・・いいのかい？」

「ええ・・・」

俺は士朗さんからユニホームを受け取ると、それにそでを通す・

さて・・・はじめるか

・・・

それから、試合に出た俺はとりあえず、一点決めたら援護にまわり・

・アシストやらなにやらで結果は5対0

・・・圧勝だな

まあ、俺が出てるんだから当たり前だな・

とまあ・・・慢心してみたわけです

翠屋で祝勝会があるそうですが・・・俺はすこし遠慮させてもらいました

なのはやアリサがすこし不機嫌だったとだけ言っておこう

そして

しげらしくすると

キュイイイイイイイイン

「始まったか・・・」

シャル『はい・・・』

さて・・・はじめての大暴れタイム

覚悟 前篇（後書き）

れ、連続投稿です

燃え尽きました

読んでくださっている皆様に無上の感謝を・

では次回・覚悟・後篇です

では！

覚悟 後篇

悠 side

「ほええええ・・・」

シャル『坊ちゃん！・・・感心している場合じゃないでしょ！..!』

あれから、俺はシャルを set upすると弓兵らしく見渡せるべ
ルの上に立って眺めている

しばらくすると、なのはも出てくるが・・・これは一人じゃしんどい
かな？

やれやれ

「トレスオン
投影開始」

弓と・・・白い刀身に捻じくれた剣を投影し、弓に番える

そして

「I am bone of my sword）わが骨子は擦じ
れ狂う）・・・偽カラドホルグ・螺旋剣？」

それを放つ

なのは side

祝勝会でみんな楽しんでしていると突然起こるジュエルシードの反応
やっぱり、あの男の子が・・・

街の大部分を見渡せるビルの上に来て見たけど・・・

ユ「こ、これは!?!」

な「す、すごい・・・」

見渡す限りの・・・樹

樹が町全体を覆うとしているみたいなの・・・

ユ「ノ」こんなに広範囲に……。でも、ここまでになる思いって……」

やっぱり・・・あの子が持ってたのはジュエルシードだったんだ・・・

ユ「とにかくジュエルシードを探さないと!……でもこの範囲からどこ
うやって……」

私があの時、気づいていれば・・・

「ユ「ノ」くん、私が探すよ……」

ユ「ノ」「えっ、でも……」

「大丈夫だよ。…行けるよね? レイジングハート」

レイハ『オーライ』

「よし、行くよ。…探して、災厄の根元を！」

レイハ『エリアサーチ』

……っ!!

「見つけたっ！」

ユ一ノ「本当に!?!」

「うん、あそこの1番大きな樹の上の方！」

見つけたことは見つけたけど……どうやって封印しよう?

遠距離で封印しようと思えば出来るかもしれないけど…

ジュエルシードのある樹の前に広がる樹の壁がそれをさせてくれない……

どうしたらいいの!?! このままじゃ街が……

私が途方に暮れていた時……

ヒュン

私の後ろから、光の矢が貫く

「えっ!?!」

それは容易く木を貫き、破壊する

ユ一ノ「っ!?!」

ユ一ノくんも驚いている・

なにせ、私の後方に立っていたのは・

悠二「・・・」

いつかのように黒いボディーマーに赤い外套をまとった・・悠二君

手に持っている弓がさっきのが彼が放つたものだを教えてくれる

悠二「俺があいつを弱体化させる。お前が封印しろ・・いいな?」

「う。うん」

いつもとは違い、冷たい言葉

やっぱり・・悠二君も怒ってるんだ・

悠二side

「俺があいつを弱体化させる。お前が封印しろ・・いいな?」

なのは「う。うん」

そして、間髪入れずにはいった桃色の砲撃でジュエルシードは封印される

さて・・・俺ももういくか・・・

「トレスオン
同調開始」

足を強化し、立っていたビルから飛び降りる

なのは・・・ここからだぜ？

お前の覚悟が試されるのは・・・

その夜

俺はいつも、寝巻きに使っている浴衣

場所は道場の縁側

手には日本酒……ではなくただのお茶

なのは「悠二くん……」

やっぱり……か……

「どうしたんだ？なのは」

後ろから、パジャマ姿のなのはが姿を見せる

なのは「悠二くんは失敗したことある？」

失敗したこと？

そりゃ、お前

「いくらでもあるぞ。」

なのは「え！？」

そう、数えきれないくらいに失敗して……

そして数えきれないくらいにひとを……

なのは「怖く……なかったの？」

「恐かったさ。だから、決めたんだ。誰の意味でもない、自分の意思でな」

そう、必要なのは覚悟

間違いを犯しても、失敗しても揺らがない覚悟

なのは「なにを？」

「覚悟さ。今回、お前はジュエルシードが起こすつる災害の一端を知った」

なのは「……」

「その時、お前はと思った」

なのは「とつても恐かったの……」

なんとか、絞り出したように呟くのは

「なら、お前はどうぞすればいいか……わかるな？」

なのは「あっ！！」

気付いたみたいだな

なら

「じゃあな、俺はもう寝る……鍵は開けておくからな」
暗に入ってきてきても言いとつげるおれ

「うん」

なにか、吹っ切れたように笑顔が弾ける

これなら、大丈夫だ

そう、安堵しながら道場を出る

なのはside

やっぱり、悠二くんは優しいな…

いままではユーノくんのお手伝いみたいな感じだったけど

私は私の意思でジュエルシードを探すの！

もう、後悔ごんごつは嫌だから

「レイジングハート」

レイハ『はい、マスター』

「改めてよろしくね」

レイハ『はい、こちらこそ』

そして、今日は悠二くんと一緒に寝ました

明日から、また頑張ろうね

ユーノくん、レイジングハート

……悠二くん

覚悟 後篇（後書き）

さて、後書きです

あゝ、書きたい

悠二「なにが書きたいんだ？」

戦闘……それもマジの

悠二「書けばいいじゃないか」

……冷静に考えてみる。お前と互角に戦えるなんて転生者ぐらいだぞ？

悠二「たしかにな……」

と、いうことで再びではありますが、皆様にお願いがあります

ずばり、コラボのお願いです

悠二「お前が書くのか？」

いや、お前がこきつかわれるということもある

……というか、俺としてはそっちの方がいい

悠二「なして？」

俺なんかかいたらほかの作者さまに失礼だからだ！

悠二「さいですか」

うん

では、悠二の設定は一番前に記載していますのでよかったらお願いします

そして、龍賀さま。感想ありがとうございます!!

では、また次回!

出合いへの誘い(前書き)

今回は月村家訪問のフラグと主に悠二の鍛錬の様子です

出会いへの誘い

悠二 side

翌日、おきると予想通り、なのはが俺のベッドにもぐりこんでいた。いつものことのだが、今日に限ってはなにか安心したような表情をしていたのは俺の気のせいじゃないだろう

あれから、ジュエルシードの発動もなく、平穏な日常が流れていた
夕方

俺は人目が見つからないようにと裏山に来ていた

それはある目的のためである

それは・・・

「……………起きろ・・・エア」

ゲートオブパピロン
王の財宝の最奥に眠る英雄王の剣

・・・『乖離剣エア』

俺が呼ぶと、背後が赤くひかり、黄金の柄が一本。

・・・現れる

円筒状のまるで突撃槍のような剣。

英雄王曰く「真実を識るもの」だそうだ

「トレスオン
解析開始」

それに解析をかけてみる・・・が

「ぐっ!？」

瞬間、頭をかち割られるような激痛が走る

それは・・・しばらく続き・・・

「く・・・やはりか・・・」

結局得られた情報は名前・・・能力のみ

本来なら、投影に必要な不可欠な創造理念などがサルベージできるの
だけ・・・

この激痛の果てにこれか・・・

なんとも割りに合わんな

シャル『やっぱり、乖離剣の投影・・・複製は無理でしたね』

「ああ」

俺の能力チートならできるのではないかと思ってやってみたが・・・この結

果だ

投影できるなら、それを劣化したものを奥の手に作って起きた方の
だが・・

できないものはしょうがない・

そう頭を切り替え、次も目標に移る

「トレスオン
投影開始」

作り出すのは俺が常用している宝具達

夫婦一对の陰陽剣・干将 莫耶

アルスター伝説の名剣を元に紅い弓兵が独自に改良を加えた偽・螺
旋剣？
ボルグ

そして、これから使うであろう・・宝具
ノーブル・ファンタズム

放てば、確実に相手を穿つまで止まる事なき猟犬『フルンテイング
赤原猟犬』

かの最速の英霊の魔槍『ゲイ・ボルグ
刺し穿つ死棘の槍』

それらを筆頭にいくつもの宝具を投影する

アロンダイト
無毀なる湖光

ゲイ・ジャルグ
破魔の紅薔薇 e t c

それらすべてが俺を中心にし、地面に突き刺さる

・・・まるで、無限の剣製もどきだなww

さて、冗談はさておき

昨日のジュエルシードも大暴走

あれでわかったんだが、俺の宝具は今の状態では強すぎる

あどときに放った偽・螺旋剣カラドボルグ?には十分の一も魔力をこめていない
というのにあれだ

だから、劣化させたものの設計図をいくつか作っておこうとしてこ
こにきている

だから、この場には俺が今後使うかもしれない宝具をすべて投影し、
集めている

シャルのおかげで非殺傷にはなっているが、それでも相手を傷付け
ないという保証はない。

「・・・投影開始トレスオン」

ために干将、莫耶を投影してみる・・・が

「ふん!!」

パライイン

骨子がもろく、かるく振っただけであっというまに壊れてしまっ

「はあ、こりゃ難航しそつだ」

シャル』ですね』

結局、俺が設計図を完成させたのはそれから三時間もあとのことだ
った

そして、家に帰ると

なのは「あっ!!...・悠二君!」

「どうしたんだ、なのは?」

なぜか、妙になのはがハイテンションだった。

なのは「今度の土曜日ね。すずかちゃんがお茶会に招待してくれたの!」

ああなるほど

もうそんな時期になるのか・・・

恭也「悠二もくるんだろ？」

恭也さんも恋人にあえるとわかって、すこし機嫌がいいみたいだ。

すずかの家・・・

あの猫天国？か

シャル『坊ちゃんって、猫はお嫌いでしたっけ？』

(いや、嫌いというわけじゃないんだがな)

あそこまでいるとな・・・

シャル『そうですね』

はあ

「そうですね。俺も一緒にしましょうかね」

なのは「うん」

さて、すずかの家といえばフェイトとの初エンカウトだな

あそこには介入する必要はないだろ

幸い、俺にはエミヤの千里眼がある

いざとなれば弓で援護すればいい。射程圏内ぎりぎりまで観察・・・だな。

その夜

「シャル、はじめてくれ」

シャル『了解』

その夜、俺は別荘の中に新しく併設した訓練場に来ていた

目の前には管理局でいうAランクからSSランクの魔導師と同等の能力を持った仮想敵（仮想敵）

対する俺は

「シャル、set up」

シャル『了解。set up』

一瞬、光りそして俺はバリアジャケットに換装する

いままでのクラウドのルフェインジャケットとはことなり、今回は英霊エミヤの赤原礼装

つくづく、俺はあいつに憧れていたんだと思う

そんなことを考えている間に人形は動き出す

今日は新しく作った設計図の実験だ

「派手にいくぜ!」

そう叫び、両手に干将と莫耶を装備する

「はっ!」

一番近くにいたやつを切り裂く。しかし、それを隙とみて三対が槍（非殺傷）を突きこむ

「ふん」

鼻で笑い、それをたやすく受け止める

が・

シユン

あっというまに数体に囲まれ、全方位からの突き

・伊達にAランク以上じゃないか。

「・・・なぎ払え！！ゲートオブパビロン王の財宝！！」

全方位からくる突きを捌きつつ、即座に発動できる王の財宝でゲートオブパビロン前方をなぎ払う

ガードしたのもいくるが、それは即座に宝具によって碎かれ、魔力素となって消える

「そら！！」

双剣を瞬時に破棄し、今度は両手にはさむように六本の黒鍵を投影する

そして・・・間髪いれずに投擲！！

鉄甲作用によって吹っ飛び、三十秒とかからずに俺の包囲は説ける

そして、後は一言・・・唱えるだけ

ブローケン・ファンタズム
「壊れた幻想」

爆！！

黒鍵は爆発し、すべての敵が戦闘不能となり魔力素に戻る

これまでの所要時間

シャル『一分弱です』

・・・上出来か。

対軍宝具や高ランクの宝具を使わずにこのタイムか・・・

まだまだ・・・いけるな

「シャル、頼む」

シャル『了解しました。魔力供給・・・展開』

そして、夜は更けていく

少年は来る未来に備え・・・

少女は・・・心躍らせ

そして・・・またある少女は・・・

彼にも・・・彼女にも・・・時は平等に過ぎていく

時に無常で・・・時に慈悲深く

世界は・・・回り続ける

出会いへの誘い（後書き）

あとがきです

今回の戦闘描写、どうだったでしょうか？

自分的にはよかったと思うのですが・・・

悠二「にしても、ホントお前型月と英霊エミヤ、好きだよな」

だって、かつこいいじゃん!!

悠二「まあ、それは認めるけどな」

では、龍賀さま。かんそうありがとうございます

呼んでくださっている皆様に無上の感謝を!!

悠二「結局それで固定か」

ああ

さて、次回はついにフェイトとのエンカウント

悠二「俺は介入しないんだろ？」

ああ。今のところはな

では次回、運命の出会い・・・

リオン&悠二「」ではまた次回(にな)!!「」

運命の出会いと新たな転生者（笑）

悠二 side

「ふああああ」

どうも、なんか最近ジュエルシードの搜索やおれ自身の鍛錬で寝不足気味の水無月悠二です

今日は友人の月村すずかの実家に御呼ばれして、そこに向かう最中だ

向かう最中・・・といってもバスに乗るだけ

おなじ小学校なのだからそんなものだ

俺となのはかにはなのはの兄の恭也さんがきている

なんでも、というか事実としてすずかの姉である忍さんと恭也シスコンさんは交際しているのだ

このリア充め！！

恭也「ゆ、悠二君・・・どうしたんだい？」

おっと、殺気が若干出てしまっていたか

軽く恭也シスコンさんが冷や汗を掻いている

前回、ボコってやったのをいまだに抱えているようだ

「なんでもないですよ」

恭也「そ、そうか・・・」

シスコン状態ではないこの人はあまり嫌いではない

むしろ好意的に思っている・・・が

あのシスコンは五月蠅い

それから、しばらくたつと馬鹿でかい月村邸が見えてくる

俺たちはバスを降り、月村邸に向かう

相変わらず、馬鹿でかい

前世の俺の家がどれくらい買えるのだろうか？

ここの土地代だけで・・・

やめよう、考えただけで鬱になってきた

プシューウ

バスが止まった・・・

ん、ここだな

恭也「悠二、ここだぞ？」

「ああ。あら・・・」

なのは「すう・・・すう」

気づくと、なのはが俺の方に寄りかかって寝てしまっていた

やれやれ、起こすのもかわいそうだな・・・

「よいしょっと」

寝ているなのはを起こさないように抱える（お姫様だっこ）と俺はバスを出す

今日に限っては恭也^{シスコ}は動かない。

仕方ないと判断してくれたのか・・・それとも

恭也「・・・（ガクガク）」

なのはの出している『邪魔したらOHANASI』オーラのせいかな？

いや、圧倒的に後者だろ

つてか、なのはもう起きてないか？

まあ・・・いいや

俺は月村邸に向かって歩き出した

・・・

しばらくするとまた馬鹿でかい玄関の前に到着する。

ピンポーン

え？

俺が押せたかつて？

道中、なのはが幸せそうな表情で起きてくれたからだよ

ガチャ（ドアの開く音）

そこから姿を見せたのはすずかをそのまんま大人にしたような容姿の忍さんとすずか

そんなでもって、メイドさん二人

忍「あら、いらっしやい。恭也、君は？」

そついや、俺は初対面だったな

「俺は水無月悠二。とりあえず、高町家の居候をしている」

忍「ああ、君がね。すずかがs「お姉ちゃん!!」「・・・あらあら

忍さんがなにか言おうとしていたが、それをすずかがとめる

「私は月村忍。すずかの姉よ」

自己紹介もそこそこに俺たちは庭に移動し、お茶を飲み始める

すずか「ん、どうしたの。悠二くん？」

「い、いやなんでもない」

言えない

見たこともない高そうなお菓子とお茶にきょどっていたなど

ふむ

「トレスオン解析開始」

俺にしか聞こえないような小声で唱え、お菓子や紅茶を分析する

俺の解析は武器以外のものも解析する

正直な話、宝具と違い、製造技術と構成物質。そんなもって作った人の憑依経験だけで済むから楽だ

これによっていままで俺はいくつもの銘菓や和菓子をコピーしているのだ！

シャル『威張って結うことじゃないですよ』

(心を読むな、シャル)

「すずか」……」

俺はそんなことに夢中で、すずかに視線とあることを忘却していた

そう……夜の一族は……聴覚や異能に対する感知能力を

……そして

キュイイイイイン

ユーノ（なのは！！）

なのは（うん！）

それから、原作通りの方法でなのははジュエルシードのほうに向かう

残ったのは俺とすずか

あれ？

アリスの奴はどうしたのだろうか？

やれやれ

「さて、んじゃ俺もなのはの奴が行方不明にならんように行きますかね」

そうわざとらしく言い……席を立つ

でも

すずか「悠二くん・・・」

「どうした？」

すずか「さつき、悠二くん・・・なにしたの？」

っ！？

そこで俺は内心ははっとするのと同時に自分のうかつさを呪った

そうだ・・・すずかは夜の一族

端的に言えば吸血種

身体能力が生まれながらにして異常に高く、体内で栄養がうまく生成できないために人の血を飲むことでそれを補っていた一族

それは同時に知られば、周りの人間から迫害される

それに、吸血種としての本能か。なにか神秘的な異能に対しては第六感ともいえる勘が働き、感知する

・・・少し前に悪いがすずかに解析をかけた時に分かった情報だ

「・・・俺は魔術師。だが、忘れないでほしい。おれはお前に敵対しない」

それと同時に俺の服の上いつもの聖骸布を纏う

すずか「え!？」

それだけいうと俺は脚を強化し、その場を後にする

あとですずかにゃあ、俺のこと話さないとな・

すずか s i d e

悠二くんがお菓子を見たとき、なにか変な感じがした

前にお姉ちゃんに聞いたことがある

”私たち”はなにか、特殊なものに触れるとそうなるって

だから・・悠二くんは”私たち”と同じように普通じゃない

でも・・もし・・悠二くんが敵になっちゃったら・

そう思うと・・怖い

でも

「さつき、悠二くん・・なにをしたの？」

気づくと、私はそんなことを悠二くんに聞いていました

聞いてしまった・

これで・・・もう悠二くんは・

後悔する私に悠二くんは意外な言葉を言いました

悠二「・・・俺は魔術師。だが、忘れないでほしい。おれはお前に敵対しない」

「え!？」

魔術師・・・そんなもの聞いたことない

”私たち”を狙うのは教会

そして、なにより悠二くんは”私たち”のことを知りながらも・・・
『敵対しない』と言ってくれた

それだけいうと、悠二くんはその魔術?で出した赤い服を纏ってどこかへ行ってしまいました

「・・・ありがとう」

私はその赤い彼にそういうと

アリサ「あれ、悠二たちは・・・って、すずか?!」

トイレだろうか?

さっきまでいなかったアリサちゃんが帰ってくるとなにかとても驚いたような表情をしていた

アリサ「なんで、あんた。泣いてんのよ!？」

「えっ!？」

アリサちゃんに言われるまで気づけませんでした

そっか

「大丈夫・・だよ。アリサちゃん」

それだけかろうじて伝えるとわたしは決意しました

悠二くんに私たちのことを話そう

彼なら・・きっと

そんな期待を持っていました

悠二side

「ちょうどいいタイミングだな」

俺が狙撃ポイントにつき、目を強化するとちょうど、暴走した猫の
ジュエルシードを封印するところだった

「やれやれ」

そう言いながら、弓を投影する

使うことはないだろうが、念のためだ

さて、どう動くことやら

なのはside

ジュエルシードを無事封印できたの

ユーノ（これで三つめ）

あと18個・・・

ヒュン

「っ!？」

レイハ『プロテクション』

突然、黄色い槍みたいな魔力弾が飛んできたの

そして

「あなたが持っているジュエルシード。おとなしく渡してもらえませんか？」

私の上

そこにいたのは金髪をツインテールにした同い年ぐらいの少女と犬のような耳をはやした大人の女のひと

悠二side

「始まったな」

なのはとフェイトの初エンカウント。

千里眼で見ているが、やっぱりフェイトのほづが一枚上手か・

しばらく観戦していると・・・ん!?

魔力の気配

「そこだっ!!」

ヒュン

なにもないところに矢を放つ

すると・・・ぐにやりと空間をゆがめ、俺と同じ年ほどの男が姿を見せた

・・・アクセラレーター一方通行？

??「貴様・・・なにもものだ!？」

あきらかに怒ってますね

なぜ？

「ふむ。君に名乗る名前など持ち合わせてはいないが」

??「転生者か・・・」

つてころはこいつもか・・・

??「俺の名前は青山剛毅。最強のオリ主だ!」

はっ？

なにこのイタイ子

運命の出会いと新たな転生者（笑）（後書き）

あとがきです

悠二「なんかイタイ奴が来たな」

うん・・

悠二「なんであんな奴を作ったんだ？」

いや、咬ませ犬とお前との比較対象

悠二「能力は？」

秘密

まあ、とりあえずフラグなんかは立てませんのでご安心を
では次回にまた！！

敵対

悠二 side

どうも、水無月悠二です

目の前には銀髪で赤い目のアルビノ状態な一方通行さんの外見をしたタイオリ主気取りがいます

どうやら、オリ主と名乗っている時点で転生者であることは間違いないだろう

剛毅「つち、エミヤみたいにかっこつけやがって」

「で、お前はなにしにきたんだ？」

とりあえず聞く。答えは分かり切ってはいるけど

「そりゃもちろん、ハーレムをつくら」
「はいはい、黙れ」
「・・・ぐ
!?!?」

吐き気がしたので黒鍵を投影して数本投げつける

ハーレムなんて夢だけにしとけ

しかし

???『プロテクション』

あいつもデバイスを持っているみたいで、割と軽く防がれる

剛毅「てめえ、なんで攻撃しやがった!!」

「てめえが気に入らねえからだ！」

シュンシュン

もう一回黒鍵を投げ付ける

が…

ガキン

？『プロテクション』

「くそ、俺にクロウがいなかったら危なかったぜ」

クロウ？

あいつのデバイスだろうか？

「シャル、俺のストレージは使えるか？」

シャル『アポカリプス以外はまだ最終調整がすんでいないため
に使用不可です』

ですがと言葉を濁すシャル

「わかってるぞ。」

おれだってこんなところで手札を使いたくなんかない

答えるのと同時に干将と莫耶を投影する

剛毅「へ、やるってか？この我様と^{オレ}」

……お前はあの金ぴか傲慢王か？

パチン

あいつが指を弾くとあいつの背後が赤く光り、水面に石を投げ込んだような紋様が広がり、剣や槍の刀身が見える

……俺も持っている英雄王の宝具『^{ゲイトオブバビロン}王の財宝』

だが…なんとも不思議だ

「ほお、お前も持っているのか。」

パチン

ウイン

俺の背後にも同じように展開される『^{ゲイトオブバビロン}王の財宝』

剛毅「なっ！？なぜ我の蔵を！？」

「フフ、これはお前の蔵じゃない。世界をその手に収めし英雄王の蔵だ」

ダダダダダダダダ

剛毅「雑種ごときが！！凶に乗るな！！」

ダダダダダダダダ

ほぼ、同時に放たれる世界の宝具の原典達

だが…

剛毅「くっ、なぜ我様が押し負ける！？」

ダダダダダダダダ

すこしずつ、だが確実に青山の宝具達は俺の宝具に打ち破られていく

それもそのはずだ

「なぜお前の宝具が俺のそれに負けるかわかるか？」

剛毅「くそくそくそくそ！！…雑種の分際で！！」

ダメだ。こいつは完全に頭に血が昇ってて人の話を聞きやしない

にしても、まんまギルガメッシュだな

そして、なぜ俺の宝具達はあいつの宝具達を破れるか？

それは簡単だ

俺の解析の魔術が言うのさ

あれらは……『贗作』だとね

剛毅「くそが！ 光栄に思えよ雑種！！ 貴様は我が剣で葬ってやる！
！……エア！」

ちよ、それは危険すぎるぞ！？

彼奴の宝具の掃射が止み、ただ一本の黄金の柄が表れる

不味い……

いや……これはチャンスだ

俺のエアは投影できなかったが……奴のなら

奴が柄を掴み、乖離剣を抜き去る

まるで闇のような真っ黒な刀身に血のように紅い紋様

俺は解析を無意識に書けると……案の定、すべての情報をサルベ

ジできた

そんなとき…

なのは「悠二くん!？」

なっ!？

やばい!

あいつは頭に血が上ってなのはに気づいていない

っち!!

俺単体だったら全アヴァロンて遠き理想郷で防げるが・・それじゃあなのはが!

剛毅「食らえ雑種!!」エヌマ…天地乖離す…」

やばい…

贗作とはいえ乖離剣

「なら!起きろ、エア!」

シャル『坊っちゃん!?!』

俺の蔵からもおなじ乖離剣が表れる

それを掴みとると即座に魔力を流し込む

ギューイイイイイイイイ

俺の魔力に反応し、円筒状の刀身が唸りをあげる

なのは「悠二くん!？」

(離れる!!なのは!!)

なのは(どうしたの!?)

(話はあとだ!)

ユーノ(なのは、早く!!)

ユーノ、Nice!!

さて、出力は最低にしとく…が、どこまでの威力があるか不明だ

俺のは正真正銘、真作の乖離剣だからな

剛毅「開闢エリシユの星!!」

「天地乖離エヌマ・エリシユす開闢の星!!」

ギューイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

二つの天地乖離す開闢の星がぶつかり合い、相殺し合う

剛毅「なぜだ！？…なぜ、私の剣が通じない！？」

ふう、贗作とはいえ乖離剣だな…

威力を最低にしたとはいえ俺の天地乖離す開闢の星と相殺とはね

「生きてるかあゝ、青山」

剛毅「くそ、なぜ我が…」

生きてるみたいだな。

なのは「悠二くん」

「大丈夫だ」

ニアを王の財宝ゲイトオブパピロンに戻す。いつどこで管理局が見ているか分からないんだ

「ジュエルシードは？」

ユーノ「突然来た金髪の魔導師に…」

「そうか…」

なのは「……………」

そこは原作通りか

剛毅「くそが!！」

シュン

苦々しく表情を歪めた剛毅は転移してしまった

やれやれ、悩みの種が増えちまったな…

まあ、なんとかなるか

「戻ろうぜ、なのは」

なのは「う、うん」

バリアジャケットを解除すると、いつもの私服になる

ちなみにギルガメッシュのと同じデザインです

戻ったら今度はさすがですか…

俺達が戻ると、なんか不機嫌オーラ丸出しのアリサとなにかを決意

したような目をしたすずかが居た

「すまんすまん、ユーノの奴が出ていっちまってな。それを探してた」

アリサ「それはすずかから聞いたわよ、私が怒ってるのはアンタがすずかを泣かしたことについてよ！」

泣かせた？

おれがか？

「……」

思い当たるのは一つ

「すまん、すこしすずかと二人にしてくれるか？」

なのは「え!？」

アリサ「……わかったわ。ちゃんと謝りなさいよ!!」

「ありがとう」

アリサ「ふん!ちゃんと謝らなかつたら承知しないからね!!／＼」

なのは「ア、アリサちゃん!？」

それだけ言つとなのはを引っ張って行ってしまう

……これは俺の推測でしかない

でも、きっとアリサは俺達を気遣ってくれたのだろう

……不器用なやつ

そしてさすが「お姉ちゃん!？」

すると、忍さんと恭也さんそして数人のメイドさんが姿を表す

うまく気配は消せてたが、俺は騙せない

忍「悠二くん。君、ほんとになにも?」

物静かだが、その目からは敵対心が見える

さて、どうなる事やら

敵対（後書き）

「どうも、作者のリオンです」

悠二「水無月悠二だ」

悠二「なぜにギルガメッシュ？」

ぶっちゆけ、エアを多く出したかったから

悠二「どうせそんな理由だと思ったよ…」

まあ、それはさておき剛毅へんたいの設定をば

名前 青山剛毅

年齢 九歳

性格 自己中 傲慢

趣味 ゲーム 女の子といちゃつくこと

好きなもの 美少女 嫁 ゲーム 自分

嫌いなもの 悠二 男

容姿 とある魔術の禁書目録インテックスの一方通行アクセラレーター
能力

ゲイトオブバビロン
・王の財宝

*ただし内包する宝具の原典達はすべて良くできた『贗作』乖離剣も含む

・FFの魔法（召喚獣は含まず）

ただし、MPがありそれ以上は撃てない

悠二「うわあ、ひでえ」

うん、自分でもそう思った
典型的な三枚目ですwww

さて、お次www

悠二とは違い、普通に因果に定められた通りに死ぬがなんの因果か、
ある程度の特典付で転生することに

当面の目的はハーレムを作ること、なのはキャラの中ではフェイトが一番好き

悠二「こりゃまたwww」

だろ？

ついでにこいつのデバイス『クロウ』はストレージデバイスでファーストが刀 セカンドが双銃 サードが大剣となっている

ま、こんなもんか

夜の一族

悠二 side

どうも、なんか最近頭痛の種が増えてきて、頭痛薬がマジで欲しくなった水無月悠二です

オリ主気取りの屑を叩きのめした後、帰るとアリサに怒鳴られ、すずかと話をすることに

そんで、さつきから視線がうざったかったから、盗み見していた二人も呼んだのだ

すると

忍「悠二くん。君、ほんとになにももの？」

忍さんが半ば、睨むようにして俺に言う

「なにもものなにも、俺はただの小学三年生ですよ」「
態々、自分から正体を明かすほど、俺はおろかじゃない

忍「では、なぜ私達のことを知っているのかしら？」

……

「それは企業秘密、敢えて言うなら俺の「魔術？」」「

……少々、迂闊だったな

最初に手札を見せちゃったのは俺だったか

忍「答えて、魔術師とはなに？」

有無を言わせないような口調

これは質問ではなく……尋問

だが……この程度の殺気……どうということはない
それに、話したからといってとくに何も意味はない

……いや、あるとしたらこいつらにだけか

「答えて俺になんの利益がある？……それに、お前らは基本無干渉
じゃなかったのか？」

忍「やはり、あなたは私達のことを……」

忍さんから出る殺気が濃くなり、メイドさんたちが身構える。

いままで、ある程度は確信していたが、確証はなかったってことか
な？

「ああ。知っている」

忍「……最後に、教会との関係は？」

教会？

キリスト教とかのあれか？なんでこの場でそんな単語が出てくんだ？

「教会とは？」

不思議に思った俺は聞き返した

忍「教会は、私たちが狙う集団よ。黒鍵と呼ばれる概念武装を使う」

マジかよ！？

それなんて月姫！？

「……黒鍵つて、これですか？」

確認のために黒鍵を投影する・・・がそれがいけなかった

忍「っ！？」

恭也「貴様っ！！」

いきなり、小太刀を抜き去ると斬り込んでくる恭也さん

ガキン

黒鍵を破棄し、使い慣れた鉈ににた中華剣・干将、莫耶で受け止める

恭也「黙れ！忍はやらせん！！」

あゝ、こいつも頭に血が昇るの速すぎ

「仕方ありませんね、少々痛い目を見てもらいますよ!」

ブン!!

干将と莫耶を投擲する

恭也「ふん!」

しかし、いくら早いとはいえ、ただの投擲では当たるわけもない

そう、ただの投擲ならねWWW

「トレスオン
投影開始」

もう一組、夫婦剣を投影する

恭也「はああああ!」

「つちい」

ガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキン
鉄と鉄のぶつかり合う甲高い音が響く

流れるような恭也さんの攻撃に俺は防御に徹していた
そして

恭也「そこだ!」

生まれたほんの小さな隙

それを見逃さずに斬り込んでくる恭也さん

だが

ガキン

恭也「なっ!？」

それを難なく干将で防ぐ

これがエミヤの戦い方であり、俺の戦い方でもある

わざと、隙を作り付け入らせ、そこから攻勢に出る

が…

忍「恭也、よけて!!」

恭也「ぐっ!？」

ガキン

突然、恭也さんの背後を襲う夫婦剣

俺が使う干将、莫耶は陰陽一对の夫婦剣。

二振りの双剣はお互いに引き合う性質を持っている

それを利用した奇襲だ

そして防がれはしたが、これで十分

「トレスオン
投影開始」

瞬時に破棄、投影して獲物を持ち帰る

それは二メートルを超すほどの長い刀

そう、前も使ったが佐々木小次郎の物干し竿だ

そして、まるで相手に背を向けるように構える

恭也「ぐっ!?!」

さすがに前回のこともあり、とっさに小太刀で防ごうとする恭也さん
でも

「秘剣…燕返し!?!」

それで防げたら、小次郎はサーヴァントとは互角に渡り合えんよ

斬!!-- 斬!!-- 斬!!--

同時に放たれる三つの斬撃

恭也「ぐはっ!?!」

それは小太刀を容易に砕き、恭也さんを襲う

……刃は潰してあるが、打撲は免れないだろうな

「だから、話を聞いて下さいって」

物干し竿を破棄すると

「俺はさすがに・・・そして、あんたたちに敵対しない」

忍「あなた・・・教会の人間じゃないの!？」

あつげにとられていた忍さんが口を開いた

「ええ、たしかに黒鍵は持っていますが・・・これは俺の魔術で作りに出した贗作ですよ」

もう一回、黒鍵を投影する

「教会の人間・・・それはこいつの柄だけを持っていませんか？」

忍「え、ええ」

ふむ、やはりか

マーボー神父やカレー好きな黒鍵使いもたしか柄だけ法衣に隠して、戦闘になったら、魔力で刀身を作ってた筈だからな…

それにしてもまさか『教会』とはね（苦笑）

「やれやれ。疲れる話だ」

にしても

この世界ってリリなのとダ・カーポ？の世界じゃないのか？

なぜに型月要素が入っているんだ？

・・・謎だ

「はぁ・・・」

忍「なぜかしら、君が私と同じくらいの年に感じるんだけど・・・」

忍さんがそんなことをつぶやいていたがきにしない

「んで、どうすんだ。すずか？」

すずか「……悠二くんは私たちのこと、怖くないの？」

………怖い？

すずか「達がか？」

はっ！！

「冗談も大概にしろ。なんで俺がお前らを怖がらないといかんのだ？」

すずか「それは…私達が普通じゃないから…」

まるで今にも消え入りそうな呟き

「ああ」

二次創作さまさままだなWWW

こうして、俺はずかど秘密を共有？した

その後、なのは達も戻ってくると、妙にすずかが勝ち誇ったような顔をしていた

なんでさ？

夜の一族（後書き）

さて、やるか

悠二「なにをだ？」

ほい！！

悠二「人の話をきけ！」

義之「ふえ？」

ということ、なんか最近出番のない義之くんに来てもらいました

さくら「ぼくもいるよ」

はい、さくらさんに関してはレギュラーかせせます

義之「お兄ちゃん久しぶり〜」

悠二「ああ、久しぶりだな」

さくら「にははは、ほんとの兄弟みたい」

ですね

仲良き事、美しきかな

さて、さくらさんよろしく

さくら「うん 月閃光火くん、竜くん。感想ありがとう」

さて、次はオリジナルになる予定です

さくら「フェイトちゃん？」

ああ

では、このへんで

全員「「「「また次回!!」「」「」

番外編 I F 恋姫無双（前書き）

本編とは一切、関係ありません

ただの作者の妄想です

設定だけは本編と共通しています

番外編 IF 恋姫無双

悠二side

どうも、何の因果か、転生することになった水無月悠二です

「ん・・・」

気がつくと、俺は荒野のど真ん中に立ち尽くしていました

「・・・ここは？」

たしか・・・俺は優衣セウスにあつて、そんで転生させてくれることになつてチートな力をもらつて恋姫無双の世界に転生させてもらつことになつたんだよな

荒野から始まるつてことは蜀 か？

まあ、いいや。

それよりもちゃんとあいつは注文通りにしてくれたのだろうか？

心配になり軽く、自分の体に意識を潜らせてみると、まるで撃鉄が無数にあるような感覚がある

ほう・・・これが魔術回路か。

その一本を起動させ

トレスオン
「同調開始」

解析の魔術を自分にかける

すると

年齢 16才

身体能力 以前の体の10倍に上昇

は？

たしか俺、身体能力の事まで注文はつけなかったよな？

魔術回路 1000本正常に稼働

……チートすぎだろ（汗

投影 可能

解析 可能

強化 可能

全投影連続層写 使用可能

宝具投影 可能

真名解放 可能

無限の剣製 展開可能

王の財宝 アクセス可能

万華鏡写輪眼& a m p ;直死の魔眼 使用可能

ふむ、至って異常はなしか

外見に関する変更あり

黒髪 金髪

黒眼 碧眼

……なんか、すごい気前のいい神様だな（笑

「さて、にしてもここはどこだ？」

？「そのためえ！！」

「ん？」

俺が声のしたほうを向くと、そちらには汚い身なりをした数人の男

盗賊だな…

盗賊「命が惜しかったら持つてるもん全部おいてきな」

盗賊B「フへへへ」

なんか、のっけから運がないな。

ひよっとしたら俺の幸運ってエミヤ並？

「トレスオン
投影開始」

投影するのは紅い弓兵の愛用していた双剣【干将】【莫耶】

それと同時に俺にはエミヤの経験と記憶が流れ込んでくる

……おし

盗賊「へ、やるってのか!？」

盗賊「野郎共、やっちなえ!」

「……来い」

こんな奴に魔眼を使う必要もない

盗賊「はあ!!」

ガキン

盗賊の刀を受けとめ、流す

盗賊「ぐっ!？」

ガン

そして、その隙に相手の意識を刈り取る

盗賊「なっ!?!」

仲間がやられたので一瞬怯む

だから

斬!!

盗賊「がはあ!?!」

すぐにやられるんだ

足元で魔力を爆発させ、一気に距離をつめて一気に気絶させる

これで二人

盗賊「くそ!?!」

ザシユ

勇敢にも斬りかかってくるがなんの苦勞もなく切り捨てる

盗賊「ひっ!?!? 化け物!?!」

残りの一人が逃げ出す

……素直に逃がすとも思っただのか?

双剣を破棄し、弓に持ち変えると

変哲のない剣をやとして放つ

ヒュン

剣は狙い違わずに盗賊まへに命中し、倒れる

「ぶっ…」

弓を破棄する

ちなみに投影した干将や莫耶はもちろん剣やも刃はつぶしてあるのも
ものすごく痛いだけだろう

悪くて骨が逝くだけだ

そんなことより

「人の戦いを盗み見とは、あんまり感心しないぜ？」

さきほどから感じていた視線

??「お見事な腕前です」

そう言つて姿を現す3人の美少女達

いきなりこいつらとエンカウンとってマジかよ・・・

関羽「我が名は関羽、字は雲長です。」

劉備「私は劉備、字は玄德です」

張飛「鈴々は張飛なのだ！」

名乗ってくれたんだから俺も名乗り返さなきゃな

んじゃ、

「俺は…エミヤ。字はない」

たぶん、分かったと思うが、名乗ったのは紅い弓兵の名前

張飛「お兄ちゃんが天の御遣いなのか？」

「ふむ…」

改めて、自分の服装を省みると…

俺の通っていた高校の学ランだった

「トレスオン 投影開始」

投影するのは紅い聖骸布で織られた外套

その下に黒いハードレザのボディアーマーを投影して装着すれば
完成

劉備「えっ！？どこからだしたの!？」

張飛「すごいのだ！」

予想以上の反応だな

関羽「やはり、あなたは…！」

劉備「あの…お願いがあるんですが？」

俺が投影した赤原礼装の具合を確かめっていると

「どうした？」

劉備「私達と一緒に来てください！」

天の御遣いって、たしかたねうま一刀だったと思うけど・

優衣（説明しましょう！！）

うわっと、突然出るな！！

優衣（ごめんごめん。でね、たねうま一刀くんにに関することだけど、とりあ
えずもうすぐ来るわ）

どこに？

優衣（もちろん、そっちに決まっているじゃない。で、どこに飛ば
す？）

俺が決めちゃっていいのかよ

優衣（大丈夫よ。元々、こっちの手違いなんだし・・・）

ん・・・なら魏で

優衣（あら、てっきり自分の手元に置いていびりまくるのかと・・・）

それもいいけどね。まあみててよ

優衣（わかったわ。じゃあ、また連絡するわ）

と、念話が切れる。

劉備「ジイイイイイイ」

「それはなぜ？」

と聞いてみるが・・・答えは分かり切っている

「私達は戦乱の世で苦しんでる人たちを助けたいんです、でも、評判がなければ人は集まらない・・・」

「・・・どうかお力をお貸しください・・・」

「お願いなのだ！」

・・・いい決意だ

トレスオン
投影開始

関羽「っ!?!?」

一瞬で上空に数えるのも億劫なほどの剣群を投影する

「いいだろう。わが無限の剣、君に預けよう」

桃香「よろしくおねがいます！！・・・私の真名は桃香です」

愛紗「私は愛紗です」

鈴々「鈴々は鈴々なのだあ」

「いいのか？・・・真名って大切なもんじゃないのか？」

桃香「大丈夫ですよ、だってエミヤさんは私たちのご主人さまなんですから」

「・・・まあ、いいや。よろしくな。桃香、愛紗、鈴々（ニッコリ）」

桃香「は、はい／＼／＼／」

愛紗「こちらこそ／＼／／」

鈴々「よろしくなのだ〜」

番外編 IF 恋姫無双（後書き）

やっと更新できた・・・orz

悠二「番外編だけだな。でも、なんで恋姫？」

・・・ただ単に書きたくなっただから

悠二「だと思った」

さくら「僕たちの出番ってあるの？」

すみません、何分世界が世界のなのでさくらさんたちは出ないと思います

さくら「そうなんだ・・・」

多分、恋姫のほうも気が向いたら書きます

多分、ないでしょうが人気次第では連載も考えています

さくら「できたらいいね」

はい。

ではさくらさん、感謝を

さくら「うん えっと、ベルワン様、マーボー様、gd様、竜様、

雨季様。感想ありがとうございます」

では、次回は本編に戻るつもりです

悠二「だといいな・・・」

うん or z

意図せぬ邂逅

悠一 side

あれから数日がたち、ジュエルシードの暴走もなく、わりと平穏な日々が流れている

それに、あの日フエイトに負けたのがよっぽど悔しかったのか、いままですらになのはが訓練に打ち込むようになった

「ふああああ」

いまは一人、散歩している
ちなみに一人ですよ？

今日は珍しく由夢や音姫もついてこなかったんだ

天変地異の予感？

(たまには一人も良いもんだな)

シャル(そうですか？なのはさん達と一緒にいるときも楽しそうですよ？)

まあ、否定はせんがね

ふらりと商店街に来てみたがやっぱり人が多い

シャル(結構な人ですね)

(うん)

さてっと、たまには一人で買い物でもするか

シャル(なら、音姫さん達と一緒にきたほうがよかったのでは?)

(分かってねえな。音姉達と一緒にきたら、俺はゆっくりできないから一人できてんだよ)

一回、音姉達と買い物に出掛けたら腕を組まされたり、食い物を奢らされたり荷物持つにされたりと…

俺がゆっくりと買い物が出来なかったからな

だから、たまには一人できたほうが良い

?「あの…」

そんな時、後ろから控えめな水樹菜々ボイス

俺が後ろを振り向くと、フェイトが立っていた

何故だか、俺とは気づいていないらしい

「おう、どうしたんだ?フェイト」

フェイト「えっ!?悠二!?!」

驚いた顔も可愛いなwww

にしてもほんとに気付いてなかったのかorz

フェイトside

私は今日は食べ物を買いに商店街に来てます

でも

フェイト「人が多い…」

予想以上に人が多いから、驚いた

でも、さすがに買わないとアルフも私もお腹が空いちゃうからね

そうやって入っていったけど

フェイト「あふう…」

あっという間に迷ってしまいました

すると、目の前に同じ年くらいの黒と白の服を着た金髪の女の子が
たっていました

長い綺麗な金の髪をポニーテールにくくっている

あの人に聞いてみようかな…

「あの…」

私が声をかけるとすこし驚いたようにこちらにふるむいた

蒼い目の綺麗…っていうよりかわいい顔

あれ？

どこかで見たことがあるような？

？「おう、どうしたんだ？フェイト」

フェイト「えっ！？悠二！？」

声を聴いて、ようやく思い出しました

驚いたように叫ぶ私を見て、なんか嬉しいような寂しいような表情を浮かべていた

戦闘のときとはちがい、優しく微笑む

悠二「迷子にでもなっちまったか？」

「う、うん／＼／／」

当てられちゃった…

は、恥ずかしい／＼／

「ゆ、悠二も買い物？」

悠二「ん、まあな。暇だからブラブラと」

そうなんだ

悠二「どれ、案内してやるか。……とはいっても、俺も多分、お前とそう変わらんだろうがなwww」

「えー!?…迷惑になっちゃうよ」

悠二「なに、暇潰しの一環だ。気にするな」

フェイト「う、うん。お願いして良い？」

悠二「まあ、泥舟に乗った気でまかせろ！」

「泥舟じゃ危ないよ!?!」

私が突っ込むとケラケラと愉快そうに笑った

悠二side

とりあえず、フェイトを近くのスーパーに案内する

打っているものの質も悪くない割りと良い店だ

値段もそこまで高くないから家計にも優しい

それから、フェイトに付き合っって荷物持ちをしていると

「なあ」

フェイト「なに?」

さっきから気になってたんだがよ…

「なんで惣菜や調理済み品ばかりとってんだ？」

フェイト「…だって、料理できないから…」

小さく呟く

だろうと、思ったよ…

「んなら、今日ぐらい俺が作ってやるよ」

フェイト「えっ!?!」

なんか今日は驚いてばかりだなWWW

「あ、拒否権はないからWWW」

フェイト「悠二…」

すこし強引すぎたかな？

ま、いつか

それから、俺たちは料理材料を買い出すとフェイトの案内で、彼女らが滞在しているマンションに向かった
歩くこと数分

フェイト「ここだよ」

どうやら着いたみたいだ

ガチャ（扉の開く音）

アルフ「おかえり、フェイトっ!？」

フェイト以外の人を瞬間、身構えるアルフ

「俺だよ、アルフ」

アルフ「なんだ、水無月か」

だが、俺だと知ったら警戒を解いてくれた

それから、フェイトの家?の居間につくと

「探し物は順調か？」

フェイト「う…うん」

いまいち、齒切れの悪い返事

やっぱり、なのはのためだろうな

手伝ってやりたいのは山々だが、下手をしてなのはどのフラグを折りかねない

アルフ「そういえば、水無月はどこにすんでるんだい？」

「おいおい、そんなに簡単に警戒を解いて良いのか？」

さつきから気になっていた事を聞く

アルフ「なに、気にすることないよ。だってフェイトがs「アルフ
!!!」」

アルフの言葉を真つ赤になったフェイトが遮る

ギューユューウ

フェイト「////////」

「時間的に昼飯か…」

ここはスルーしてやるのが優しさか…

まあ、これじゃスルーしたことにならんと思っけど

フェイト「う、うん////////」

アルフ「あんたが料理するのかい？」

「まあね。なにか注文はあるか？」

アルフ「肉!!」

アルフの即答

……あまりに予想通りすぎて苦笑する

「フェイトは？」

フエイト「私は…なんでも」

んじゃあ、中華でいいか

「トレスオン
投影開始」

投影するのは包丁やフライパンなどの調理用具

最後に黒のエプロンを投影すると、これで用意は万端？だ

とりあえず、オーソドックスなのでいいか

30分後

「いつちよ上がりだなwww」

まあ、そこそこ上手く出来たんじゃないか？

フエイト「美味しそう…」

「んじゃ、食べますか」

3人「「「いただきます!!!」」」

ちょっと遅いが、昼飯には丁度いいだろう

二人とも、美味しそうに食べてくれてた

……なんか少し得した気分

それから、俺達は雑談などをして時間を過ごすと夕暮れになっていた
たのでおいとました

高町家に帰ると

なのは「あ、悠二くん」

なんか、なのはが上機嫌だった

理由を聞いてみると今度の連休にアリス達と一緒に温泉旅行に行くらしい

「ま、楽しんでくるといい」

なのは「え？悠二くんもくるんだよ」

「は？」

音姫「だから弟くんもいっしょだよ」

……マジかよ

まあ、音姉たちがこう言っているじてんで士郎さんや桃子さんも動いているんだろっから、拒否権は無しだろっな…

「わーったよ」

さて、どうなることやら

意図せぬ邂逅（後書き）

ようやく更新できました

悠二「なんでこんなにおくれたんだ？」

テスト

さくら「にやはは、それじゃ仕方ないね」

テストの結果は・・・効かないでくれ

悠二「ご愁傷様・・・」

さて、それはさておき今回はフェイトとのフラグ強化でした

悠二「あのな。ただ単に料理を作りに行っただけだぞ？」

さくら「悠くんの鈍感」

リア充なんて爆発すればいいのに

悠二「俺は鈍感じゃない！！」

さくら&リオン「鈍感だから」

悠二「orz」

まあ、あほはさておき次は温泉話？

さくら「だね。」

最後に読んでくださっている皆様に無上の感謝を!!

さくら「じゃあね」

ではまた次回!!

悠二「俺は・・・鈍感・・・なんかじゃない・・・orz」

お詫びとお願い

ええと、今回改めて自分の作品を見直したところ、とてつもなく駄文でそんなでもってこれからあとが続くか自信がなかったために、書き直すことにします

とりあえず、今日あたりには新たな小説として投稿する予定です

こんな駄文をお気に入りにしてくださっていた方。

そしてわざわざ、感想を書いていた方には本当に申し訳ありません

龍賀さまにいただいたデバイスのアイデアは次回作に持ち越す予定です。

せっかく頂いたのに使えずに申し訳ありません（泣

予定としては無印や、A sへの介入はなしの方面で書くつもりです

とりあえず、さくらとの邂逅の後、リリなのとの接点を作りつつ、フラグ作成で、DC?本編・・・って感じになります

途中で挫折したダメ作者ですが、よろしくお願いします

重ねて申し上げますが、本当に申し訳ありません

では、失礼いたします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2175q/>

されども彼は桜に願う

2011年3月7日18時32分発行